

---

# 私は愛どる！春香＆千早過去編

ダディP

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

私は愛どる！春香&千早過去編

### 【Nコード】

N1123V

### 【作者名】

ダディP

### 【あらすじ】

876・765合同ライブから帰ってきた千早は、絵理を迎えに行くからと預けられた愛・涼とともに765プロ事務所へ。

そこで四年前の話を愛に尋ねられ、千早は過去へを思いを馳せる。

## その1『繋がった正反对』（前書き）

私が某動画サイトで書かせてもらっているnovelism@ste  
rの過去話みたいなものです。

最近作りかけの動画が吹っ飛んでしまい、仕方ないから過去編を文章化でもしてストレスを解消しよう！とカッとなって作ったのですが、もちろん今後動画にも上げることになるので、ネタばれしてほしくないという方は閲覧を中止することをお勧めします。

ここでは四年前のフリープロデューサー日高と、春香千早、765  
プロとの出会いから始まる物語を描いていくつもりです。

## その1『繋がった正反対』

「ねえ、私の歌ばかり聴いてて、そんなに楽しい？」

うん、楽しいよ？だってお姉ちゃん歌上手だし、

それに 歌うから・・・。

「・・・ん？」

一瞬声が聞こえたような気がして、日高は公園の広場のほうに振り向いた。

公園に時計はいらない。その時その時の人の出入りで、大体の時間がわかる。

そこで遊んでいた子供らがそろそろと帰っていくいわば人時計に逆らって、うまい具合に夕日の差し込む位置を避けたベンチに、彼は腰かけていた。

勿論遊んでいたからではない。日高はマイナーなところだがアイドルのフリープロデューサーだ。

『伝説』とまで言われたアイドル『日高舞』の夫にして元プロデューサー。そんな彼はその時の大成功が原因で起きる、当然とも言える過度の期待に添えないプロデューサー生活を送っている。

プロデューサーとして三年前にフリーになってから、少しのブランクを挟んで五年目。業界では彼はまだ若い。元々日高舞の成功だって彼自身の功績ではなく、彼女の素質に頼っていた面が大きい。彼もそれを自覚しているからこそ、その重圧を受けきれないでいる。今日はそうして悩みながらここに座っていたのだが・・・。

（今のは歌声・・・だったな）

ふと聞こえたその声は、まるで彼を呼び寄せるためのそのように、日高を自然とベンチから歩きださせていた。

「~~~~」

「・・・ここか」

広場に出ると、歌声がはっきりする。姿は小さくてよくわからな  
いが、公園のすみで一人の少女が歌の練習をしているようだ。

綺麗な歌声だ。ずっと日高舞の歌を聴いていた彼にそう思わせる  
ほど、彼女の歌声は対角線上に立つ彼にも透き通って響く。

ただ、上手いといってもプロの歌手に比べればまだまだ程遠い。

人の心を掴んで離さないような魅力があるわけでもない。それでも  
何かがこう、心の中で引っかかるのだ、彼女の歌は。

「・・・？」

風がひとつ吹き抜ける。群青の髪がさらさらとなびいたその瞬間、  
歌声が少し途切れたように感じた。

「・・・あの、何かご用でしょうか？」

「・・・え？」

感じた、ではない。事実彼女は歌を止めて、今まさしく日高の目  
の前に立っているのだ。

気がつけば彼女に一番近いベンチに座り、じっと見つめてしまっ  
ていたらしい。

「あ、ああ悪い。別にそういうわけじゃないんだ。ただ上手いになっ  
て思ってたさ」

「そう、ですか？ありがとうございます」

取り繕って賛辞を述べたものの、彼女は日高に対する不信感がぬ  
ぐえないようだった。

「音楽学校にでも通っているのかい？趣味で片付けるにはもったい  
ない歌声だけだ」

「いえ、そんなところには通ってません。全部独学なんです」

かたい表情は崩さずに、彼女は律義に答える。

「私は、歌手になりたいんです」      そう付け加えて。

心に引っかかるなにか、その正体はまだわからない。彼女の表情からは何も見えなかった。

「キミ、名前は？」

「え？」

「え・・・あ」

引っかかりの解決を求めるがままに、名前を尋ねる。・・・が、これはなんかまずくないか？

初対面の女の子を無言で見つめた上で突然名前を聞くなんて、向こうからしたら不審者みたいじゃないか！？

「あ、いや、すまない忘れてくれ！答えたくなければ答えなくていいから！」

「！？」

心証は最悪だ・・・。これじゃ変な目で見られるのも仕方な・・・。

「・・・如月、千早です」

「・・・え？」

そんな彼を滑稽に思ったからか、初めて彼女は柔らかに表情を崩した。

「聞こえませんでしたか？」

「いや、聞こえたよ。悪い、取り乱したりして」

「いえ、少しびつくりしましたけど」

そうして、少し笑う。

「つと、俺の紹介が遅れたね。俺は日高嶺司、仕事は・・・プロデューサーって言うてもわからないよな。アイドルを育てる仕事をしてるんだ」

「アイドルの、ぷろでゅーさー？」

「・・・ああ、うん。マイナーな職業だからわからなくてもいいよ」「そう、なんですか？」

いかにも聞き慣れないといった風な面持ちの千早に、日高は軽く

頷いた。

「アイドルというと、あのテレビに出ていたりする子たちのことですか？」

「ああ。とはいっても今はどの事務所にも属してないフリーだし、担当のアイドルもないけどね」

気がつけば陽はもうずいぶん隠れてしまっている。公園に見える人影はもうほとんどなかった。

「・・・話し込んで悪かったね、練習の邪魔をしちゃったな」

「いえ、こうして話すことが少ないので、楽しかったですよ？」

「ならいいんだけど・・・。さて、そろそろ帰らないで大丈夫？夜遅くなると危ないし、親も心配するだろ？」

「・・・いえ、もう少し練習していきます。いつも遅い時間までやっているので、母もわかつていると思いますし」

(・・・?)

一瞬、表情が曇ったような気がした。ただ、気がただけで実際千早の顔は何も語ってはくれなかった。

「そっか。俺が口出すことじゃないしな、俺は帰るよ。それじゃあ」  
「ええ、それでは」

・・・俺は一体何をしているんだろう。

帰路の途中にあるわけでもないのに、真っ先に足が向いた。

気になっているのだろう。ただ、そのはつきりした理由がわからないのだ。

歌が上手い子はたくさん見てきたし、夢のために努力している子なんて例に漏れることなく全員がそれだった。

「・・・こんにちは、日高さん」

「や、連日悪いね」

何故かこの子だけは妙に気になる。それはきつと初めて彼女に会

ったときから感じている心の引っかかりと、最後に見た暗い表情のせいだろ。・・・やっぱりその引っかかりの理由はわからないままだが。

「わざわざ声をかけてくれなくてもよかったのに」

「まったくの他人というわけではありませんし、挨拶ぐらいは。それに丁度休憩しようと思っていたところです。・・・隣、いいですか？」

「ん、ちょっと待っててくれ」

そう言っただけで腰を浮かし、背後にある自販機に歩いていく。ガシャン！という音を出して自販機は二本の缶ジュースを吐き出した。

「ほい、どっちがいい？」

「え？いえそんな、悪いです！」

「いいのいいの、もう買っちゃったし」

遠慮するなど千早の目の前に缶を差し出す。しゅしゅと右手に持っていたものに手を伸ばした。

「それにしても、昨日今日と来てくれますけど・・・暇なんですか？」

「ぐっ・・・！来てるのは俺が来たいからだが、暇といわれるのは堪えるな・・・」

「ふふ、冗談です。でも、やっぱりまだ所属する事務所は決まってないんですか？」

「ん、いや。今日こんなことがあってね」

それは、三時間ほど前に遡る。

街中というのは雑踏というイメージがあり、皆がそれぞれ別の行動をとるための通過点であるため気を留めるようなことはないと思いがちだが、実はそうではない。

横ばかり向いた矢印の中で一本だけ上を向いた矢印を見れば、誰



だって気になる。注目するほどではないまでも、「何だろう、あれ」程度には思うだろう。

・・・それがより長く、より太く、他と色が違えばなおさらである。  
(なんだ、あの人・・・?)

夏ではないが、日焼けしている人ならきつとどこにでもにいるだろう。そうではない。

『真つ黒』なのだ。服との継ぎ目がわからないぐらいに。そんな人間の形をした『何か』が道行く人たちを値踏みするように眺めている。

(あまり目を合わせたくはないな・・・)

ああいう手合いは無視するに限る。そう思うと気持ち早足になるが、日高は気づいていなかった。この時皆に合わせて常速にしていたほうが、彼の思惑に合っていたことを。

街中とは『雑踏』という文字通りのイメージがあるが実はそうではない。個々の速度は違うはずなのに、不思議なことに街中での速度というのは対して変わらないのだ。そんな中で一人だけ速度を上げれば、今そこにいる黒い彼のように目立つのは自明の理であり。

「おお、そのキミ！ちよつと待ってくれたまえ」

「・・・」

同じく目立つ上、雑踏を値踏みしていた彼の目に留まるのは当たり前だった。

声をかけられてしまつては、乱暴に無視するわけにもいかない。

「・・・何です？」

「うむ、よく来てくれたね。・・・ほうほう、うーむ・・・なかなか、いい面構えをしているね」

「はあ・・・あの、あなたは？」

「ああ、すまない、自己紹介が遅れてしまつたね。私は高木順一郎  
といってね、アイドル事務所の社長をしているのだよ」

「アイドルの、ですか？」

「うむ、しかし最近始めたばかりでね、アイドルも一人しかいない

うえに、人材不足だ。そういうわけでこうして街まで出向いているのだが、なかなか見つからなくてねえ・・・」

「それはもしかして、プロデューサーを探しているんですか？」

「ん？ああ、そうだが、よくわかったねえ。それによくプロデューサーなんて言葉を知っているね。もしかして、芸能業界にかかわっていたりするのかい？」

「とりあえずフリープロデューサーですけど・・・所属はないです」  
「ほう、それではぴったりじゃないか！キミにはなかなか才能を感じるよ。ティンときた！どうだい、765プロで働いてみる気はないかね？」

（ていん？）

高木という人は目を輝かせて（黒くてよくわからないが）、是非にと推してくる。

「才能は、ないと思いますよ。期待に答えられないプレッシャーで、事務所という縛りから逃げただけですから。実力の裏付けがあつてフリーをやってる人とは違いますし」

うつうつしい、という感情は不思議にも感じなかった。ただここも同じだと、日高はたかをくくっているのだ。

実力以上の期待をかけられるのはうんざりだ。そんなことは舞のプロデュース終了からずっと当たり前のようにあつたことだ。新人二年目から時の人というふうに扱われ、皆はそれがすべて舞の実力だということなど知らず持ち上げる。だからもしここでプロデュース活動をするならば、自分の力が理解され、過度の期待をされないことが条件だと、日高は思っていた。

が、日高の自分を卑下するような言葉に対する、高木の返答は予想とは違っていた。

「プレッシャーから逃げたいならアイドルプロデューサーを辞めればいいじゃないかね。それをしないということは、キミがこの仕事に誇りを持っている証拠だよ。それに私は、人選眼には自信があるのだよ。もしウチで働く気が起きたなら、アポはいらないから7

65プロまで来てくれたまえ。地図を渡しておこう」

765プロはいつでもキミを待っているよ！

そう言っただけは、その場を立ち去った。

変に心地よい期待をかけられた気分だった。

「・・・変な人ですね」

「やっぱりそう思うか？」

回想話を終えた千早の第一声は、予想の範疇をまったく射たものだった。のだが、

「いえ、その高木っていう人もそうですけど・・・あなたもですよ、日高さん」

「え、俺？」

それは予想していなかった。思わず素っ頓狂な声で聞き返す。

「ええ、だって口調が完全にその高木さんのこと信じ切っていましたよ？」

「・・・すごいな千早は。プロデューサーになれるんじゃないか？」

「遠慮しておきます」

「はつきり言うなあ・・・」

完璧に千早の言うとおりであった。日高は事実彼の言葉に人を信じさせる力があるように思っている。

「でも、よかったじゃないですか。事務所？は小さいみたいですけど」

「大きい小さいは関係ないさ。そこに夢を目指してる子がいるなら俺は自分のできる限りのことをする。それは変わらないからね」

そこまで言っただけ、彼はふと千早のほうを見た。

「って、千早もそうだったな」

「私は、歌手が夢ですから。アイドルには興味ありませんし」

「わかってるよ。ただやっぱり力になれなかったなって悔しいだけだ」

「・・・本当に、変な人ですね。そうやって他人のために何でもできるって人、私は見たことないです」

「そうか？そんな珍しいものでもないと思うけど」

褒めてくれているらしいのだが、『変な人』扱いはそれほど嬉しいものではないな・・・。

「いえ、羨ましいです。私にできることといえば、未熟なこの歌しかありませんから」

「・・・千早？」

・・・また、あの顔だ。

苦痛に耐えて無理をしているような苦悶の表情ではなく、どちらかといえば胸の中でチクリと痛む棘がなかなか抜けないうったそれだ。

「いえ、ごめんなさい。ちょっとしゃべりすぎました。練習に戻らせてもらいますね」

「ん、頑張つてな」

『俺に出来ることはないか？』

なんて、軽々しく訊けるわけがない。あの千早の表情を見てもうたら。でも、できることなら何とかしてやりたい。

千早と同じように、胸中のしこりは次第に棘のようになって日高にも痛みを引き起こした。

日高が765プロの戸を叩いたのはその翌日のことだ。

「・・・あれ」

正確には戸を叩いても返事がなかったので、ノブを回したのは、と言いなおすのが妥当かもしれないが。

「すいませーん、誰かいませんかー？」

声をかけながら事務所内に歩を進める。不思議なことに、人の気配がしない。鍵が開いていたのに。

「~~~~・・・・」

「ん？」

いや、気配はある。というか声が聞こえた。

どうやら奥の別室に人がいるようだ。なんて不用心な。

先ほど出した声の大きさに気づかないほどだ。あまり大声を出しても意味がないだろう。それならこのドアを開けて直接声をかけたほうが効率がいい。それにこのあたりはちょっとした商店街のようになっている。あまり大声を出しすぎるのは迷惑だろうからな。

ガチャリ、と少し重い扉を開ける。

ピンク色のリボンが二つくっついた後頭部が見える。ドアに背を向けてソファに座っているその女の子は、イヤホンをつけてなにか口ずさんでいた。

これは、G O M Y W A Y！かな？あまり音程が取れてないようだが・・・。

（いやいや、そうじゃない）

別にこの子を考察しに来たわけではない。早く声をかけなければ。

「あの、もしもし？」

「~~~~・・・？あれ、社長もう帰ってきたんで、す・・・？」

イヤホンをとって彼女が振り返る。そこから硬直までのスムーズな流れ。

・・・いやな予感がする。

ここは落ち着いて、刺激しないように接しなければ。

「あのさ、高木社長はいるかな？社長に呼ばれてここに来たんだ」

「きゃああああ！！？どっ、どどどどど泥棒さんですか！？どこから入ってきたんですかぁ！？」

すでに落ち着いてなかった！？

彼女は日高から最も離れた部屋の向かいに全速力で逃げ去った。

とはいえ場所の狭さが狭さなだけに、大した距離ではないが。

「いや、ちゃんと玄関から入ってきたよ。そうじゃなくて社長を・・・」

「えつとえつと、泥棒だから警察の110番!? じゃなくってそれは救急車だつけ!？」

「頼むから少し落ち着いて話を聞いてくれ!」

そのうち混乱してどちらとも呼び出しかねない。あまりやりたくなかったが強硬手段をとるしかなさそうだ。ソファを飛び越え彼女に向かってダッシュ、しかるのちに携帯を握る手を止める。その時だった。

「春香ちゃん? 何か大声出してたけどだいじょ、う……?」

「え……」

事務制服を着た女性は、現状を見るなり少し考え込むような表情を見せ、そして言い放つ。

「おはようございます、あなたが社長の言っていたプロデューサーさんですね?」

「え? あ、はい」

「え? ぷ、ぷろでゅーさー? 泥棒じゃなくて?」

「そうよ、春香ちゃん。大体泥棒に入るとして」

女性はひとつ間をおき、そしてにこやかに、

「ここから何か盗っていけるものがあると思う?」

「……」

「……」

彼女のいかにも間抜けそうでの的を射た一言で、この騒ぎは幕を閉じた。

「はっはっは、すまないね。まだ始めたばかりの弱小事務所で、いろいろとやることがあつて東奔西走しているのだが……如何せん前にも言つたように人材不足だね。事務所を空けることが多くなつてしまうのだよ」

それから十分程度して、高木が中心街から帰ってきた。昨日と同じように街中でスカウトしていたというが、成果は得られなかったようだ。

「それでもさすがに鍵を閉め忘れるのは・・・」

「戸締りは小鳥くんに任せていたんだがねえ・・・彼女はしっかりしているんだがたまにこういう風におつちょこちよいなところが出てしまうみたいでな」

社長の言葉に、小鳥と呼ばれた事務員は顔を少し赤くした。

（いや、おつちょこちよいというレベルじゃないだろうこれは・・・）

もし本当に泥棒が入ってきたらどうするつもりだったのか。

「それはさておき、よく来てくれた。改めて、765芸能事務所社長、高木順一郎だ。そして彼女が事務の音無小鳥くん」

「先程はお騒がせしました。音無小鳥です」

「日高嶺司です。これからよろしくお願いします」

「彼女には今まで天海くんの世話も任せていた。簡単にでいいからあとで引き継いでおいてくれたまえ。・・・小鳥くん、書類の用意をしておいてくれないか」

「わかりました」

小鳥はそう言って会議室から出ていく。物腰の柔らかい人だ。社長の言っていた『しっかりしている』というのはうそではないようだ。

さて、と社長は話を正す。

「もうわかるとは思うが、キミの隣に座っている子が担当してもらうアイドル、天海春香くん。これからはアイドルとプロデューサー、二人三脚で頑張ってくれたまえ」

「あ、あのくさつきはごめんなさい・・・恥ずかしいところを見せちゃって・・・」

紹介を受けた直後、春香はバツの悪そうな顔で隣の日高を覗き見た。

「別にいいよ、勝手に入ってきた俺が悪かったわけだしな」

そう諭すも春香は口ごもる。じっと見てみると赤面したり青ざめたりと、本当に恥ずかしかったらしい。日高は遠慮がちに笑って場

を濁した。

「それじゃあ日高くん、私たちはキミを歓迎するよ。書類整理が終わったら早速天海くんとの活動を始めてほしい。ようこそ、765プロへ！」

書類整理は滞りなく終了し、日高は早速応接室（というか事務所の一部をカーテンで囲っているだけだが）にて活動を開始する。

対面のソファに春香を座らせ、自分はオフィスから持ってきた事務椅子に座った。

「それじゃ最初だし、ミーティングというか、軽く話そうか。お互いのことをほとんど知らないわけだしな、えっと・・・呼び方は春香、でいいのか？」

「うわひゃい！？は、はいそれで！」

「・・・もしかして緊張してる？」

ソファから跳ね上がりそうな勢いで背筋を伸ばし、目に見えてかたくなっている体から耳をつんざくような声が上がった。

「は、はい・・・少し」

「すこしどころじゃないぞ？大丈夫だよ、そんな堅苦しい話をするつもりないし」

「すいません・・・」

（困ったな・・・）

こんな調子じゃ距離なんて縮みやしない。どんな話題なら春香をリラックスさせられるか。

考え始めたとき、ふと先程見たプロフィールを思い出す。

「・・・ウチの娘がさ」

「・・・え？娘さん、ですか？」

「ああ、愛って言うんだけど、もうすぐ九歳になるんだ。ま、もうすぐって言うっても二カ月ぐらい後の話だけど」



「はぁ・・・」

「それでさ、今年はちょっと趣向を変えて、いつもと違う場所でバースデーケーキを買ってやりたいんだけど、俺はそこところあまり詳しくなくてね・・・。春香はいいケーキ屋、知ってたりしない？」

「え、あ、はい！知ってます！この辺のほうがいいですか？」

「ああ、よろしく頼むよ」

「それじゃまずは・・・わたしがよく行ってる商店街のケーキ屋さんで・・・」

甘いものが好きだというプロフィールの通り、春香は味の良し悪しからデコレーションやら値段やらを事小一時間ほどに渡って事細かに話し始めた。

好きなことを話すときの春香の表情からは、先程のかたさなど微塵も感じることはなかった。

余談だが、日高が普段利用していた場所は春香のお勧めには入っていないかった。

(・・・すまん、愛)

「・・・さ、そろそろ本題に入ろうか、春香」

「で、このチョコレートのデコレーションはすっごくかわいくてですね・・・えと、ほんだいですか？」

「・・・やっぱり忘れてたか」

「・・・あ。・・・えへへ」

ペロツと舌をだして照れ笑い。なんというか、無邪気というべきなのかちよつと幼いというべきかわかりかねる表情だ。

「えっと、自己紹介、はしたから・・・あ、日高さんの呼び方はどうしましょう？」

「なんでもいいよ。日高さんでもプロデューサーでも」

それを聞いた春香は、『間をとってプロデューサーさんで』、と答えた。

その発想はなかった。まあいいか、別に不快なわけでもないし。「で、お話ですよね？なんでも聞いてください！」

「そんなに構えなくても・・・じゃあ、春香はなんでアイドルになりたいんだ？」

「ぶ、プロデューサーさん、質問が難しいですよ・・・」

「そ、そうか？誰かに憧れたとか、こんな風になりたいからとか、そんな感じでいいんだぞ？」

頭のリボンが日高に少し近くなる。眉間にしわを寄せて、顔を少し伏せているのだ。

うーん、と少し唸るような声が聞こえてから、春香は顔を上げた。「憧れなら、たくさんありますけど・・・全部話すと長くなっちゃいそうなんです。」

・・・歌が好きだから、とかじゃだめですか？」

（『私、歌手になりたいんです』）

「なんていうかわたし、あんまり歌上手じゃないですけど・・・。わたし、歌を歌うのが大好きなんです！だから、わたしの歌で誰かが元気になってくれればいいなって思っただけです！」

（『そうやって他人のために何でもできるって人、私は見たことないです』）

（『羨ましいです。私にできることといえば、未熟なこの歌しかありませんから』）

春香の言葉につられて、千早の言葉が次々とフラッシュバックする。

どう考えても正反対の二人なのに、何故か思い出すこの言葉の本

質は・・・。

「・・・あの、プロデューサーさん？聞いてます？」

「・・・え、うわっ？」

気がつくと、春香が心配そうに覗きこんでいる。

随分近くなっていた距離に対応しきれず、椅子から跳ね上がるのは日高の番だった。

「もうっ、プロデューサーさんってば急に黙っちゃったからどうしたのかな、って思っただけなのに、そんなに驚かなくても・・・」

「いや、ごめん。なんというか、既視感みたいなものが・・・」

「どーせありきたりな理由ですよ・・・」

「ちがう！そういう意味じゃなくて！」

ふてくされてしまった春香を必死になだめる日高。この誤解を解くために十分程度の時間を要した。

閑話休題。

「よ、よし。とりあえず俺の聞きたいことは聞いたし、次は春香の番だな。何か気になることとかないか？」

「んー・・・気になることといえば・・・プロデューサーさんの年齢とか、趣味とか？」

「お見合いじゃないんだから・・・まあ確かに突然気になることって言われても、そのぐらいしか出てこないか」

よく考えてみたらそりゃそうだよな、と苦笑い。日高の出した質問だつて、初対面の担当アイドルとは必ずしている話だったし。

「えと、じゃあですね・・・プロデューサーさんはここに来る前には何をしてたんですか？」

「ん？そりゃ、プロデューサーだけど？」

そーじゃなくてですねっ、と春香は大きくかぶりを振った。

「どこの事務所で働いてた、とかどんなアイドルを担当してた、とかいろいろあるじゃないですかぁ！」

「うーん・・・」

どうしたものか。

正直舞の事を話したくはない。だが舞を除いて六人のアイドルをプロデュースしてきたが、どの子も大体Ｃランク（メジャーアイドル）止まり。今後のことを考えると、春香に不安を与えないようにしたほうがいいのだろうか。

「・・・まーた考え込んだ。それじゃプロデューサーさん、今までプロデュースしてて一番楽しかったアイドルって言うたら答えられます？」

「うん、それだったらやっぱり舞かもな・・・あ？」

「え・・・？ま、舞ってあの・・・？」

いけない、口が滑った・・・。

しかし、舞がアイドルを引退したのは七・八年も前の話。

（春香が知ってる可能性は低いはず・・・！）

「ああ、ＣランクだったかＢランクだったかで終わっちゃっただけだ」

「舞って・・・えっと、確かプロデューサーさんの名前って・・・」

「変な推理を巡らせんでもよろしい」

嘘口上など右から左。春香はしばらくぶつぶつと呟いてから、

「って、そんなわけないですよーねー」

「すごい棒読みだな・・・はは」

「あはは・・・」

「しゃあちよおおおっつ！！！！」

「叫ぶなあーっ！！そして走り去るなあーっ！！」

765プロの空気は、数秒間だが二人の足音に支配された。

「ああ、知っていたよ」

「・・・はい？」

そろそろ窓際が紅く染まるつかという頃。

社長室のソファにもたれかかっていた高木の声に答えたのは二人

分の気の抜けたようなセリフだった。

「いや、知っているとも。私も少し前まではプロデューサーだったからね。そもそも業界人間だったら『日高舞』のプロデューサーを知らないわけがないだろう？」

「社長、知ってて黙ってたんですか！？ひどいですよー！」

春香の非難なぞどこ吹く風と、高木は高笑いするばかり。その横で小鳥は別段困ったというわけでもなく、ただやれやれといった身振り。高木の周囲の人間からすれば当たり前の光景なのだろう。

「それじゃあ、やっぱり俺が『日高舞のプロデューサーだった』から、あの時声をかけたんですか？」

しかし日高にとつてそれは裏切られたようなものだ。自分の信じた言葉が上辺だけだったということになる。

「・・・日高くん、キミは私の言葉をもう忘れたのかね？」

「え？」

打って変わって落ち着いた調子の高木に、思わず声を上げる。その表情は街中で見たそれとも、先程までの『愉快な社長』のそれとも違う、765プロダクション社長として、部下に対するときのそれだった。

「『キミには才能を感じる』と。これは酷な話だが、プロデューサーという仕事は決して明るみに出ない『陰』の仕事だ。たとえばファンがアイドルを見たとして、それはすべてアイドルの實力、アイドルの功績だ。そしてそのプロデューサーの正確な實力を知っているのは、担当したアイドルだけ。つまりね・・・」

「あなたのプロデューサーとしての力は、まだ社長にもわからないってことですよ、日高さん」

「おお、こらこら、小鳥くん。私のセリフをとらないでくれたまえ」

「ふふ、ごめんなさい。はい、今日はお疲れ様です、日高さん」

いつから給湯室に行っていたのか、小鳥は高木の言葉を遮り、コーヒーの入った湯呑をテーブルに置いた。同じようにあと二人分を分ける（春香には別にジュースを入れた湯呑が手渡された）。

「あ、ありがとうございます小鳥さん。・・・でも社長、そんな適当な」

「適当なんかではないさ」高木は立ち上がり、少し胸をそらす。

「私にはこの目がある。昔から人を見る目『だけ』は自信があつてね。私はキミに見える人間性を信じて勧誘した、それだけだよ。私はキミを、信頼しているからね」

「じゃちよー、自慢げにしないで下さいよ。・・・その『人を見る目』の所為ですとプロデューサーもアイドル候補生もいなかったんですからー」

「そうですよ社長！私たちがどれだけ人不足に喘いでたか・・・！」

「お、おお・・・？ひ、日高くん、私は今自分でもなかなかいいことを言つたと思うんだが、なぜ彼女らに怒られているのだろう？」

「・・・はは、あははは！」

「ひ、日高くん！笑つていないで助けてくれたまえ！」

呆れる『アイドル』春香に、激昂する『事務員』小鳥、困惑する『社長』高木。

そしてねじが外れたように笑う『プロデューサー』日高。

これが彼ら、765プロの始まりである。

（そして、さつきから脳裏に映るもう一人・・・もし彼女がここに加わったなら・・・）

そんな空気の中で日高は一人、心を決めた。

「社長、ちょっといいですか？」

春香を帰し、書類を片し始めた日高は、自分にその権限がないことを思い出し、手を止めて高木に声をかける。

丁度業務も終わり、高木はオフィスで小鳥の入れたコーヒーをちびちびと口を含みながら休憩しているようだ。日高の声に「なにかね？」と短く応答した。

「いえ、初日から申し訳ないんですけど・・・アイドル候補生が一人増えるのは、事務所的に大丈夫でしょうか？」

「・・・それは、スカウトしたい子がいる、ということかね？」

「はい。勿論社長には一度見てもらうつもりですが、もしスカウトさせてもらえるなら、今から行つてこようと思うんです」

「うむ、その意欲はいいね！どんどんやってくれたまえ！」

「ありがとうございます。・・・まあ、アイドルには興味ないと前に一度言われてしまっているんですけどね、あはは」

「ごまかすように笑い、止めていた手を動かし始める。」

「ふむ・・・要するにキミはその子を放っておけないのだね」

「・・・はい。今日確信しました。春香にはきつと彼女がいい刺激になるし、彼女にはきつと春香が・・・ああいう子が隣にいることが必要なんだと思って。勿論独り善がりなのは自覚してます。けどきつと私が彼女にできるのはそれぐらいしかないのです」

「うむ、先程も言つたように、私はキミを信じている。765プロのプロデューサーはキミだ。アイドルのため、夢を追う子のために、自分の思うことを存分にやってくれたまえ！」

高木の心からの言葉に日高は一礼し、事務所の扉を出た。

「いいんですか、社長？あんなこと言つちやつて。予算もそんなにないのに、ちよつと無責任な気がしますけど・・・」

「おお、小鳥くん。今日は御苦労さまだね」

流しで湯呑を洗っていた小鳥が首だけひょこつと出して高木に問う。

「さつきも言つた通り、765のプロデューサーは彼だ。そして社長は私。アイドルのために働くのがプロデューサーの役目ならば、それをなるべく円滑に運べるように策するのが社長の務めだよ。悪いけど小鳥くん、資金繰りの手伝いを頼むよ」

快活に笑う高木にひとつ溜息をもらし、小鳥は流しに視線を戻す。

（ま、わかつてましたけどね）

影で見えないが、口元には笑みが浮かんでいるようにも見えた。

カン、カンと連続する金属音。765プロから続く階段を下りて、日高はひとつ深呼吸。

（そういえばスカウトするのって、初めてなんだよなあ・・・）

「どうしたんですかプロデューサーさん。暗い顔ですよ？」

「ああ、春香が気にするようなことじゃ・・・春香？」

「はい。プロデューサーさん出てくるの遅いですよあ！」

「え、なんだ俺を待ってたのか？何か訊き忘れたことでもあったか？」

違います、と日高の言葉を一蹴し、よくわからない方向を指さした。

「さ、行きましょう！」

「はい？」

「はい？じゃなくって！プロデューサーさん、今から如月さんのところに行くんですよね？」

ああ、うん。日高は生返事。春香はどこか楽しそうに今にも走りださんとしている。

ああ、そういえばさっきちょっと話したっけなあ。

公園で如月千早という歌が上手い女の子と話したことを思い出した、と確かその程度しか話してなかったような気がするが、それにしてもこの春香の高揚っぷりは一体なんなのか。

「プロデューサーさん、早く連れてってくださいよう！」

「いや待て春香。お前なんでそんなに楽しそうなんだ？」

「だって、歌が上手なんですよね、その子」

「うん、まあ」

『春香よりは』と言いかけて寸でのとこで止める。

「プロデューサーさんが何度も聞きに行くような歌だし、わたしも聞いてみたいなって思っ。連れてってくださいますよね？」



「うん、まあ・・・俺に断る理由はないからいいけど・・・」  
千早がなんて言うだろうか・・・。第一ここ最近ずっと彼女の邪魔してる気がするし。

出始めに日高の漏らした溜息の意味を、春香は知らない。

「・・・ん、あー、あー」

喉の調子を確かめ、千早はひとつ息を吐いた。

（ちよっと、声を出しすぎたかしら）

練習を中断するのは気乗りしないが、喉を壊しては元も子もない。千早は自販機まで歩いてゆき、入金相応のボトル茶を拾い上げた。  
（そういえば、今日は来ないのかしら？）

ここ最近ベンチに見る影が今日はない。まあいないならいいで練習に専念するだけの話なのだが、何か物足りないような気もする。だが彼のおかげで練習の量が少なくなっているのも事実。今のうちに詰めておかないと、と千早は休憩もそこそこに立ち上がる。

「お、と。今から始めるのか？」

が、それはいつもの声に阻まれた。

「・・・こんばんは」

「う・・・いや悪い。気にしないで続けてくれ」

別に嫌なわけではないが、出鼻を挫かれて千早は少し不機嫌そうに挨拶を返した。

「うわ、綺麗な人ですねえ・・・」

日高の隣にはどこか気の抜けたような表情をした春香。千早は彼女を示して、

「・・・日高さん、そちらの人は？」と尋ねる。

「ああ、紹介するよ。この子は天海春香、これから俺が担当するアイドル候補生だ」

「あ、あのっ、天海春香です！あなたが・・・如月さん？」

「はい、そうですけど」

そっけなく答えて、二人にベンチを勧める。

「ごめんな、ちょっと話したらこの子、どうしても千早の歌を聴いてみたいって聞かなくてさ」

「それは、別に構いませんけど・・・私の歌は、まだ人に聞いてもらせるほどのものでは」

「別に歌わなくても、発声練習でもなんでも千早がいつもやっていることをやってくれればいいからさ」

「はあ・・・」

何が楽しいんだろう、と首をかしげながらも、千早は楽譜を片手に広場へ戻る。

例のごとくうしろの自販機からジュースを二本持って、日高はベンチに座りなおした。

「プロデューサーさん、プロデューサーさん」

「うん？」春香は千早を気遣ってか少し小声で日高に話しかける。

「如月さんって、すっごく綺麗ですね・・・それになんか大人っぽいし。如月さんっていくつなんですか？」

「いや、それは聞いてないから何とも・・・春香と同年ぐらいなんじゃないかな、背丈とかで判断するなら。ほい、スポドリでいいかな？」

「あ、ありがとうございます」

くるくるとキャップを外して、一口飲もうと傾ける。が、その動作は千早の歌声によって止められた。

「こ、声も綺麗・・・それに、とっても上手・・・」

「ん、そうだな」

春香のきらきらとした目はじつと千早を見つめていた。注目を受けている当人は歌っている最中だからか、たいして気にも留めずに歌い続ける。

（さすがに三日連続で聴いていれば、この引っかかりの原因もわかるかと思っただが・・・）

全然わからない。千早のこの異様な無表情はもつと深くに原因があるということだろうか。

それが俺は、千早が春香と組むことで何か変わると思っている。正反対なのに、いやだからこそ。

彼女らの根っこは同じなのだ。歌に対する『真摯な思い』は二人とも同じで、それが別の方向に向かっているんだ。少なくとも日高はそう感じている。

彼女らは『繋がった正反対』だと。

「あ、あの！わたしすっごく感動しました！！」

「え？あの、天海さん・・・？」

「・・・え？ちよっ、春香何してるんだ！？千早の邪魔しちゃだめだろ！」

「いえ、一曲歌い終わった後ですから、それは大丈夫です。けど・・・一体どうしたんですか？」

気がつくとな隣に春香がいない。慌てて声のしたほうに顔を向ければ、そこには千早の超至近距離に、両手を掴んで詰め寄る春香の姿があった。

「如月さん歌すごい上手で、聴いててずっとドキドキしてたんです！あの、如月さん、アイドルなんてなってみる気ないですか？わたし、あなたと一緒に歌いたいんです！」

それは俺の役目なんだが・・・。

「・・・ごめんなさい。私、アイドルには興味がないんです」

「そ、そうですか・・・」

「いや千早、少しだけ考えてみてくれないかな？アイドル候補生として765プロに入ってほしいんだ」

「ぶ、プロデューサーさん、如月さんはさっき・・・」

「日高さんまで・・・私、前にも言っただけですけど・・・」

ああ、その通りだ。と日高。だがな、と続ける。

「こうして独学ですつとやっているよりは、ボーカルアイドルとしてちゃんとした施設で力をつけるべきだと思うんだ。その力を荒削

りにするのは、悪いとは言わないけど、もったいないと俺は思う」  
「し、しかし私は・・・純粹に歌を歌いたいです。アイドルを馬鹿にするわけじゃないですけど、アイドルの世界は純粹な歌の勝負ではないです」

「そ、そんなこと・・・ないわけじゃないけど・・・うう、プロデューサーさあん！」

「・・・どうしても、考えてはもらえないのかな？」

力なく口を開く日高に、千早は首を縦に振った。

「ごめんなさい。どうしても私は歌手になりたいんです」

「そっか・・・つまらないこと訊いてごめんな。そろそろ俺は帰るよ」

春香、行こうか。そう言って日高は春香を連れ歩く。春香は終始しかめっ面を崩さなかったが、広場の出口に着いたあたりで、ぱつと顔を上げる。

（・・・！ティンときた！！）

「もう、『日高舞の元プロデューサー』さんでも、できないことはあるんですね！！！」

「はっ！？春香！？何を大声で・・・」

「え・・・『日高舞の元プロデューサー』？」

（ば、馬鹿！突然何言ってるんだ！そんなこと今は関係・・・ん？）  
春香の顔には先程の相ではなく、まるでいたずらに成功した喜びつこのような、そんな表情があった。その顔に面喰って、日高は毒気を抜かれた。

「ひ、日高さん・・・今の話は、本当ですか？」

「え、千早・・・？」

「本当ですよ、如月さん！この人は、八年前ぐらいに引退した伝説のアイドル『日高舞』のプロデューサーだったんですよーっ！！」

「春香、一体何考えて・・・？」

「プロデューサーさんは嫌がってましたけども」

「え？」

春香は日高に向かって満面の笑顔を作り、

「こういう使い方なら、いいですよね？」と囁いた。

（『日高舞』・・・あの伝説の歌姫を、間近で見ていた人・・・）

そして事は春香の思い通りに運ぶことになる。

「日高さん、先程の話ですが、やはり受けさせてもらっていいでしょうか」

「え、いやでも・・・プロデューサーだったってだけだ。舞の実力に俺は関わってないぞ」

「それでも、きっと得られるものはあるような気がします。日高舞の歌は何度も聴いてました。私の、憧れですから」

「本当に、いいのか？」

日高は心配そうに問うが、千早の意思は固い。

（そういうふうに見られるのは、心が痛むんだが・・・）

だがまあ、今回はよしとしておこう。気は進まないが結果的に千早のスカウトに成功したわけだし。

それに、力が足りないと自覚しているのならそれをこれから補えばいい。春香と千早の期待に応えられるように。

「そっか、わかった。来週の土曜、昼の一時に765プロ・・・えっと、社長にこの前渡された地図があつたな。ここまで来てくれ。

ほら、春香。改めて挨拶しとけ」

「は、はい！わたし、天海春香、16才です！まだあんまり上手じゃないけど・・・歌が好きなら絶対負けませんから、これからよろしくお願いします！」

よほどうれいいのか、日高を押しつけてずいとお前に出る。相変わらず目はきらきらと輝きを放ったままだ。

（本当に、千早の歌に惹かれたみたいだな・・・）

これから共に活動する上で、少し心配になる日高。

「如月千早、15才です。歌以外には興味はありませんが、歌うちヤンスができるならば何でもするつもりです。これからよろしく、天海さん」

ピシッ！

音まで聞こえてきそうなくらいわかりやすく固まる春香。

「え、え、と・・・年下あ！？」

「あ、天海さん！？どうしたの！？」

「本当に、大丈夫か・・・？」

何かにシヨックを受けてへたり込む春香に戸惑う千早。

今からこんなことで、『ユニット』として活動していけるのだからか・・・。

今後を思い、本気で心配する日高であった。

## その2『e・S誕生』（前書き）

今回は前回から一週間後の話です。

ユニット名にセンスがないのは気にしないでね？（迫真

春香と千早の共通点と相違点、演出するにはまだまだ腕が足りませんが、甘めの採点で読んでいただければなと思っています。

あ、あとひとつ注意書きとして、日高Pの名前は嶺司<sup>ねいじ</sup>と読みます。動画の視聴者様から賜った名前です。感謝感謝。

## その2『e・S誕生』

四月中旬、土曜日。

日高の朝は早い。

朝の四時に起きて着替え、早朝の散歩を楽しむ。

まだ温まりきってない空気を受けて頭を醒ます。日高の家がある住宅街から765プロの反対側に出ると、千早に初めて会った公園に出る。

千早の歌を聴いた広場を回り、煉瓦色の歩道を、脇に生い茂る樹木を見ながらぶらぶらと出口に向かって歩く。

（今日から、始まりだな）

先週起こったことを鮮明に思い出した日高は、気合いを入れなおすかのように大きな伸びをひとつ。そうして我が家へと帰ればそこには舞の作ってくれた朝食が、

「ないわよ」

「ですよー」

元伝説のアイドルにして日高嶺司の妻、日高舞はエプロンを身につけながら、彼の応答にふう、と溜息をもらした。

「あのね、まだ五時よ？出来てるわけがないでしょう」

「ん、まあそうか」

外はようやく日が差してきたが、舞の示す通り時計の短針は「5」の少し前にある。

「って、舞はなんでもう起きてるんだ？」

「愛がね、今日早く起こせて言うんだもの」

「なにかあったっけ？」

「日直。前日直のときに遅刻して怒られたから、気にしてるんじゃない？それにあなただって、今日は早く起きると思ってね」



「なんで」

「自分の部屋に行ってカレンダーでも見てきなさいな。あんなに力強くマークしてあれば、誰だって今日何かあるって思うわよ」

こうマジックで何度もぐるぐる、と舞は人差し指を動かしてみせる。

今日が初日なんでしょ？と付け加えてから、彼女はキッチンへと移動した。

「初日は先週だけだな」

「あなたにとつての初日は今日なんでしょ？前より酷くなってるわよ、プロデュース初日に早く起きる癖。前回は五時半だったのに」「一時間半ぐらい、大して変わらないよ」そう呟いて日高はダイニングの椅子に腰を下ろした。

初日であるなら気合いが入って早く起きることなど当たり前、と日高は思っているが、舞はそれが心配らしい。そりゃあ心配にもなるだろう。

今回　つまり昨日の場合、日高が最後に起きているのを舞が確認したのは深夜一時。そこからすぐ寝たとしても三時間の睡眠しか取っていないのだ。それでいてこのすっきりとした表情は一体何なのか。

（愛も、こういうところは嶺司さんに似てほしかったわ）

到底似通わない二階のねぼすけを思い「ふふっ」と笑みをこぼした。

（・・・やっぱり早かったか）

まだ早いという舞の制止を振り切り、まだ人もまばらな道路を行った結果がこれだ。

誰かもう来ているだろう、と思っていたのだが、765プロからは光の一筋も漏れてはいない。

「出直すかな・・・」

そうして自宅へと踵を返したその時、上空から声が降りかかる。

「あれ？プロデューサーさん！」

それは間違いようもなく春香の声だった。振り返ってみると階段を下りて、

「おつはようござい、うわったった・・・！」

今にも転びそうな・・・転んだ春香の姿があった。

「あいたたた・・・もー、プロデューサーさんも見てたなら助けてくださいよーっ！」

「悪い悪い・・・いやそうじゃなくて、なんで春香がこんな時間に？今日は昼一時からって言っただろ？」

幸い怪我はしていないらしい。驚異の防御力だな、などと感心しつつ日高は軽く打ったらしい頭をさすってやる。

「えへへ・・・だつてわたし、今日がすつごく楽しみで仕方なくって！もう昨日の夜なんて眠れなかったぐらいで・・・今もちよっと眠いです・・・ふああ」

「んー、女の子が夜更かしはよくないんじゃないか？」

「それはそうなんですけど・・・それよりプロデューサーさんはなんで帰ろうとしたんですか？せつかく来たんだし、事務所入っちゃえばいいのに」

「そうしたいのは山々なんだがな、鍵、開いてたか？」

そう言つて事務所の扉を指さすと、春香はふるふると首を振った。やはり開いていないらしい。もしかしたらまたおつちよこちよいをやらかしてくれるかと思つたが、そう上手い具合に都合よく行くはずもなく。

「それじゃあ入れないな。俺は鍵渡されてないから」

「えーっ！！？そ、それじゃあわたしはどうすれば！？まだ朝の七時だから、小鳥さんだつて来ないのに！？」

「え、なに？小鳥さんってそんなに来るの遅いのか？」

「二週間に一回社長に軽く怒られるぐらいには」

日高は肩を落とす。全然しつかりしてないじゃないか……。

しかしそんな愚痴など言ってられない。春香は眠たそうだが事務所の扉に寄りかかって寝かせるわけにもいかない。

「仕方ない、春香。ちよつと歩こうか」

「んう……どこにですかあ？」

「まあまあ、ついてくればわかるよ」

そうして日高は眠い目をこする春香を連れて来た道を戻り始めた。

「……で？」

舞は今の言葉をさっぱり理解できない、といったふう棘のある言葉を返した。

「いやだからさ、春香に舞のベッド使わせてやってくれないか？」

日高と同じく玄関で棒立ちにされている春香は状況が飲み込めていないのか、たまに首をかしげては小さくあくび。

それを見た舞はため息交じりに「とにかく、上がらせちゃって」と呟いた。

「いいの？担当アイドルを家に連れ込んだじゃって」

「人聞きの悪いことを言うなよ……まあ確かに言ってしまうえばその通りだけど」

事務所が開いてなかったんだ、と言うとそれ見たことかとても言いたげに不敵な笑みを見せた舞は、無言でキッチンへと戻り、二人分のコーヒーを淹れる。

朝七時半。本当の光景はこうでなければいけない。春香を舞の部屋へと連れて行った日高はテーブルの前へと腰を下ろした。春香は結局何もわからないままにベッドへと倒れこみ、すぐさま深い眠りへと沈んでいったが……まあ起きた時に説明すれば大丈夫か。「そついえば愛はもう学校か」

「入れ違いみたいにして出て行つたわよ。学校は反対側だから、あなたは見なかったかもしれないけど。そんなに早く出なくてもよかったのね。・・・はい」

「ありがとう、と言。そうしてから舞の差し出したコーヒを一口啜った。」

「で、春香ちゃんだっけ？どうするのよあの子。寝かせたはいいけど、あれじゃしばらく起きないわよ？」

「とりあえず八時まで様子を見て、起こしても起きないようだったら俺は事務所に行かなくちゃいけないから・・・」

「・・・私に面倒を見ろ、と」

「・・・ダメか？」

「別にダメっていうわけじゃないわよ。それで何すればいいの？」  
「んー、と唸ってから日高は手帳を取り出し、空欄のページを一枚破る。」

メモを一枚書き終えた日高は、出るときに枕元にでも置いておくよ、と二つ折りにしてテーブルのわきに置いた。

「ちよくちよく様子見てさ、もし起きたらこのメモに目を通すように言つてやつてくれ。・・・と、もう八時か。ちよつと様子見てくるよ」

「その前にひとつ聞いていい？」

舞の部屋へ向かおうとする日高を引き留め、

「なんで愛の部屋じゃないの？」

「・・・まあ、いろいろ散らばつてゐるだらうからな」

「勿論、手伝つてくれるんでしょ？」

「・・・」

願いを聞いてもらう立場の日高に拒否権はなく、手伝いという名の一人作業に二十分程度を要した。

尚、事務所まで三十分、それからさらに十分経ってからやつと事務所の鍵が開くことになるのを日高はまだ知らない。

（ん．．．ふかふか．．．『ふかふか』？）

右半身の感触は春香の靄がかかった頭にかすかな疑問を提示した。それでも体を起こすことを頭は拒否しているようで、仕方なしに薄く瞼を上げてみる。

窓からは日が射しており、春香に周囲の状況を確認するに足る明るさで、それによってまず浮かんだのは、

「．．．ん．．．．．？」

ここ、どこ？

疑問に対する答えではなく、さらに重なった疑問だった。少なくとも春香には全く見覚えのないこの光景がどうして目の前にあるのか。

とりあえず事務所にベッドはない。事務所のソファなんてスプリングが伸びきって寝心地なんて言ってられない座り心地なのに、『ふかふか』みたいな感想が出るはずがない。手を伸ばしてあたりを探ってみれば、体にはご丁寧にタオルケットまでかかっている。

（えーつと確か、電車で事務所まで来たのが七時で．．．プロデューサーさんに会って、それから．．．？）

寝起きの頭を精一杯働かせても思い出せるのはそこまでで、とにかく起きようとタオルケットを退かしたその時、部屋のドアがゆっくり開いた。

「あらおはよ。気分はどお？」

「．．．え？」

エプロンをつけた彼女は近寄るなりベッドの縁に座って春香を覗きこむ。

（あれ、あれ．．．？この人、すつごく．．．）

「まだ眠い？でももう十一時なんだけど。そろそろ起きたほうがいいんじゃない？」

「．．．ああ」

・・・なるほど、夢だ。

よく覚えてない部屋のふかふかベッドで寝てて、起きたら『日高舞』にとんでもなく似てる人が目の前に来るなんて、こんなにわかりやすい夢もそうない。

「起きなさい」

「はい・・・」

枕に顔を埋め二度寝の体勢を取ろうとした春香を舞の一言が止める。

春香の意識が完全に覚醒したのがこの瞬間だったことは言うまでもない。

「日高くん、そろそろ休憩にしよう」

「あ、はい」

高木の一声で日高はペンを動かしていた手を止める。デスクに置いた携帯をとって開いてみるが、着信はない。

（まだ起きてないのか・・・？）

春香を寝かせてからすでに四時間程度経過している。集合時間は十三時だから問題ないのだが、やはり様子を見に行ったほうがいいだろうか。どうせ迎えに行くのだし。

「せっかくの昼休みだ。どうだい、これからみんなで、下のたるき亭で食事でもしないかね？」

「みんなで、ですか・・・」

そんな日高に高木は親睦を深めんとするため昼食の誘いを切り出した。

たるき亭とは、765プロビルの一階に入っている食事処である。ランチタイムしか営業していない上客入りも目を見張るようなものではなく、それでいて破格の安さをさりげなく提示している。

たるき亭自体は765プロが出来る前からあるのだが、それまで

もそのような感じだったため何故営業が成り立っているのかなどと、いろいろ謎が多い場所である。

「おごりですか、社長!？」

会議室から駆け付けた（と言ってもドアをひとつ開けるだけだが）小鳥はそれだったら是非！と目を輝かせる。

「も、勿論だとも」とのたまった後、高木は自分の財布を取り出して溜息。舞い上がっている小鳥にその表情は見えていない。

「日高くんはどうするかね？」

「お誘いはありがたいんですけど、ちょっとこれから外に出る用事があるので、今回は遠慮させてもらいますね」

広げた資料はそのままに、財布を持って立ち上がる。

~~~~~

丁度ポケットに入れようとしていた携帯から着信音が鳴り響く。通話ボタンを押しながら日高は事務所を後にした。

バスで住宅街を抜けて、765プロの前をしばらく行くと、中心街 日高と高木が初めて会った街に出る。都会のような雰囲気  
のこの街ではカフェやらレストランやらと横文字が多い。

日高と並んで歩いていた春香はその街並みを眺めながら「うわー・  
・なんかおしゃれですね」などと田舎者のようなセリフを放った。

「あれ、春香このあたり詳しいんじゃないのか？前ケーキ屋のことは結構詳しく教えてくれたけど」

「わたしが詳しいのはケーキ屋さんだけですよ？このあたりにはあまり来ませんし」

「ん？ショッピングとかで高校の友達とかと来たりしないのか？」

「しませんよ。だって家遠いですし。電車で二時間ぐらいしないと来れませんから」

「そんなに遠いと通勤も大変・・・ちよつと待て、二時間？」

あれ、社長から聞いてませんか？と春香は知っていると思つていたのか不思議そうに首を傾げる。

事務所で春香を見たのが朝の七時。通勤に二時間弱かかるとしたら・・・始発がぎりぎり出てるか出てないかという時間帯だ。

人間、睡眠時間が足りなくても意外と活動できるということだろうか、とこっそり自分を正当化しつつ、昼食をとる場所を探す。

「プロデューサーさんどうしたんですか？そんなにきよるきよるして」

「んー？もう昼時だからさ、昼食を取らないと。春香はどこで食べたいとか希望あるか？」

「え？そ、そんな悪いですよ！お昼は自分でお弁当を作つて・・・」  
そう叫んでかばんの中を探るが、それらしいものは一向に出てこない。

「・・・来ようと思つてたんですけど・・・」

「あれだけ早く家を出たなら、時間はないよな」

日高の指摘を受けて顔を赤くする。

「うーん、こんなことならもう少し集合時間早めて、千早も一緒に食べればよかったなあ」

「それだったら、一度事務所に戻つて如月さん・・・えっと、なんか言いにくいなあ。千早ちゃんを待つてみたらどうですか？もう十二時だから、ご飯食べてると遅れちゃうかも」

「それもそうか。ファミレスでミーティングつていうのも何か締まらないものがあるけど・・・それじゃあどこでやるか目星をつけておかないと。もう一度ここにきて迷うのも時間の無駄だし。でも春香、一時間も待てるか？寝るとすぐく体力使うつて聞いたことあるけど」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「あはは・・・」



紅潮した頬をさらに赤らめながらも、春香は苦笑という形で反応を返した。

「オーケー、それじゃあシュークリームでも買って戻ろうか。千早と、社長や小鳥さんの分も買って帰らないとな」

「はいっ！あ、シュークリームがおいしいお店はですね・・・」  
目を爛々と輝かせながら迷うことなくナビゲートを始める春香。  
しまいには置いて行かれた日高を、

「プロデューサーさん、ここですよ、ここ！！」

などと春香が大声で呼びつける。

街から出る直前まで二人は一般大衆から奇異の目を向けられることとなった。

「こんにちは」

十三時。時間丁度に千早は765のドアノブを回す。

「あ、失礼しました・・・えっと？申し訳ありませんけど、お名前を頂戴してもよろしいですか？」

彼女を出迎えたのは、カーテンで仕切られた向こう側の空間から突然現れた、この狭い室内で何故かインカムをつけた女性だった。

「如月、千早です。日高さんからのスカウトを受けてきたんですけど・・・」

「スカウト・・・ああ、先週日高さんが言ってた子！ちょっと待っててくださいね」

「え、あの、ちょっと・・・？」

早々と奥の別室へ立ち去って行った彼女には、千早の声など届いていないようだった。戸惑ったような声は虚空に空しく響いて消える。

（・・・それにしても、なんというか・・・小さいところだけ）  
こんなところでアイドルを始めたとして、自分の目指すものは見

えるのか。千早は早速不安になるが、先週聞いた言葉を思い出して、決意を新たにする。

（彼の下にすることで、少しでも『日高舞』に近づけるなら・・・）あの伝説的ボーカルアイドル『日高舞』の元プロデューサーである彼から、何かを吸収することができれば・・・あるいは私にとって代え難い経験になるかもしれない。

「おお、キミが日高くんの言っていた子かね？初めまして、になるかな。私がこのプロダクションの社長、高木順一朗だ。以後、よろしく頼むよ？」

「如月千早です、よろしくお願いします。ところで・・・日高さんはどこに？十三時集合だと言われたのですが」

「ああ、日高くんは先程中心街から帰ってきたところだね、これから彼の買ってきたシュークリームを食べようかとしていたところだ」よく見ると真っ黒な中で一点、白い部分がよく目立つ場所がある。なるほどあそこが口なのだろう、と千早は一人よくわからない納得を示した。

「すみません社長、遅れました！っと、おはよう千早。よく来てくれたな」

「こんにちは日高さん。今回はありがとうございます」

「うん、これからよろしくな・・・まあ、立ち話もなんだし、とりあえずこれでも食べるか？」

日高の差し出したシュークリームを遠慮がちに両手で覆うようにして受け取り、会議室へと移動。そこには・・・。

「ぷ、ぷろでゅーさーさん！！早くティッシュ取ってください、ティッシュ！」

「いや、この部屋探したけど見つからなかったろう！？ちょっと取ってくるから待ってる！」

シューから次々とあふれてくるカスタードクリームと格闘する先週の少女の姿があった。

「・・・」

「ふぁ、ちふぁやちゃんおふぁよー!!」

「だぁー春香っ!しゃべるな!こぼれそうだから!」

・・・本当にここで、何か得られるものがあるのだろうか?  
当然のごとくそんな疑問を抱く千早。

その数十秒後、千早の口元でも同じ格闘が繰り広げられることになる。

「これから二人には、ユニットとして活動してもらうことになる」

「ゆにつと、ですか?」

日高の言葉に千早が訊き返す。ユニットという言葉がどうにも聞き慣れないらしい。

その横で春香は、胸のあたりまでしかない小さめのもの(?)だがいかに甘々しいチョコレートサンデーにスプーンを差し込んでいた。

「春香ー?聞ってるかー?お前と千早と一緒に歌うんだぞー」

「ふぁーい、聞いてますよ?」

さつき甘いものを食べたばかりなのに、よくもまあそんなに入るものだと感心する。

「私が、天海さんと・・・ですか?」

「千早ちゃん、呼び捨てでいいよ?年だってそんなに変わらないでしょ?」

「あ、ええ・・・それじゃあ『春香』でいいかしら」

「うん、そのほうがいいよ!これからユニットとして一緒に頑張るんだから!」

「・・・ええ、そうね」

・・・一人で歌いたいのだけど、あまり出しゃばるのはよくないわよね。

「千早ちゃんと歌うの、楽しみだな」 と満足げな春香を他所に千早はどこか不満そうな表情を隠しつつ、置いてあるドリンクに手を伸ばした。

「んーでも、なんでユニットなんです？765プロのアイドルってわたしたちだけですし、別々のほうがいいんじゃないですかね？」  
「いや、765プロはまだアイドルを一人も出していない事務所だからな。別々に出すよりユニットを組んでインパクトをとるほうが大事だ。一人より二人。オーディションを勝ち抜く可能性も増えるだろうし、それに」

一呼吸溜めてから日高は二人を見比べながら「お前たちがユニットを組むと、面白そうだからな」と口元に笑みを浮かべながら。

「お、面白い・・・？」

「プロデューサーさん、理由になってないですよー」

「いいのいいの。そのうちわかるからさ。それよりこれから売り出していくにあたってユニット名を決めておかないと」

そうして日高は手帳を取り出すと、空白のページを線で二分し、その中央に『春香』『千早』と書いてそれぞれを円で囲った。

「出来るだけ二人のイメージにあった名前を付けたいんだけど、俺一人じゃ知ってること少ないし、どうしても限界があるからな。そこに二人で趣味とか特技とか、好きな色でもなんでもいいから書き出してくれ。ユニット名はそれに沿って決めよう」

「・・・み、見事にばらばらだな・・・」

銀色のスプーンがカラン、と底で音を立てると同時に、二人は紙を日高へと返した。

好きな色はピンクと青。趣味はお菓子作りと音楽鑑賞。イメージは元気と冷静。唯一の接点は『歌』という一点のみで、ある程度の予感はしていたものの、日高は頭を抱えた。

「これじゃちょっと難しいな・・・何か、他に何かないか？こう一発でイメージできてアイドルっぽいやつ！」

「そんなこと言われても・・・大体、アイドルっぽいつてどんなのですかぁ！」

「でも、確かに・・・まったくの逆ね、私たち」

千早が感慨深そうに言ったその言葉はさらに日高を悩ませる。その目の前で春香は「やっぱり横文字ですよね！そうなんですよね！」とよくわからない一人合点を繰り返していった。

千早は改めてメモを取り上げて眺めてみる。やけに大きく書かれた二人の名前の下に、スペースが圧迫されるほど書き込んでいる春香と、逆にまだ倍ぐらい書き込めるスペースを残している千早。

性格もイメージも全く違うこの二人で接点を見つけようと言うのもなかなか苦労する話だ。

(・・・横文字?)

ふと春香の言葉を思い出した千早は、メモを左から右へ舐めるように見つめる。

『千早春香好きなもの甘いもの好きなものクラシック音楽好きな色ピンク好きな・・・』

「・・・『早春』？」

「・・・千早、それはちよつと・・・」

「なんかアイドルっぽくないかも？」

「違うわ。ほら、こうして書くと・・・」

二人は怪訝そうな顔をするが、それとは関係なく千早は持っていたメモを裏返し、そこに

『千早 春香』

と離して大きく書き込んだ。

「で、こことここを消して・・・」

『早春』

「千」と「香」、この二文字を千早はがしやがしやと塗りつぶし、そこに出てきたのは、先程千早の呟いた『早春』という文字だった。

「あー、確かに。全然気付かなかった」

「えっと、英語で言う・・・early Spring?」

「じゃあ頭文字でも取ってみるか？」

「あ、それだったらこっちのほうがいいですよー」

日高によつて『E S』という文字が書き出され、そこに春香が加筆した結果。

「『e・S』か、いいじゃないか。おしゃれな感じになつたな……ところでこれ、何て読むんだ？」

「『エス』？それとも『イーズ』？ね、千早ちゃん。これって何て読むのかな？」

千早は首を傾げながら「何て読むのかしら」としれつと言い放つたのち、ストローを啜える。

「ち、千早ちゃん……もう少し考えてくれても……」

「思いつきで言つたことがまさかこうなるなんて思わなかつたから、何も考えてないのよ」

「ん、さつき春香の提案した『エス』はよさそうなんだが、確かそんなタイトルの映画があつたような気がするからNGだし……」

「なんで映画と同じだとダメなんです？」

「いや映画と同じってだけならいいんだが……ちよつとその内容がえぐいやつでさ……前に舞が借りて来たのを愛が見て、眠れなくなつたって聞いたことあるんだよ」

それを聞いた春香の顔がみるみる青ざめていく。

「ほつ、ホラーですか？わ、わたし別のがいいです！」

「春香は怖いのだメなの？」

「やめて千早ちゃん！怖いとか一番思い出しちゃだめなの！！うあーんっ、昨日見たのが蘇つてくるうーっ！」

「な、なんで見たの……？」

グラスを丁寧に戻かしながらテーブルに突つ伏す春香にどうしたらいいのかと千早はあたふたしながら手を空に泳がせる。日高は「千早、放っておいて大丈夫だよ」と呆れ気味に一言。

「怖いもの見たさってやつじゃないか？ウチの愛もそれで眠れなくなつてたし。でも確かあればホラーじゃなかったような気が……」

スプラッターは大丈夫なのにホラーが苦手な舞がまさかホラーを借りてくるわけがない、と日高は断言できる。

昔舞がそれを苦手とすることを知らず、借りて来た典型的ホラー映画を起動した瞬間、舞がソファの裏側に隠れてちよこちよ顔を覗かせていたのはいい思い出だ。はたして今でもそうかはわからないが、とりあえず得意ではないだろう。

基準がよくわからない上に普段とのギャップが凄まじいのだが・  
・そう考えるとそういうところは、舞と愛では似ていない。

「じゃあ『イーズ』でいいんじゃないですか？語呂もよさそうですし」隣で鳥肌を静めている春香の代わりに、千早が答える。

「んー、もう少しキリよく『イーズ』もいいかもなあ・・・まあ、今そこで悩んでも仕方ないし二人に決めてもらおう。春香、千早。どっちがいいかな？」

「私は、どちらでも」

「・・・・・」

「・・・・春香？」

「・・・あつ、え、えと『イーズ』はなんかそのまんまですよね！わたしは『イーズ』がいいなあ〜！」

「ど、どうした春香？声が上ずってるぞ？」

「ごっごめんなさい、ちよつとぼーっとしちゃって・・・」

「春香、大丈夫？」

心配そうに覗きこむ千早に春香は勢いよく頷く。

「んー、大丈夫ならいいんだけど。やつぱり寝不足なんじゃないかな？」

「だいじょーぶですよ、わたしちゃんと寝ましたもん！」

「はは、これから夜更かしはしないようにな。それじゃあ二人のユニット名は今日から『e・s』だ。二人はこれからアイドルユニットとして活動していくことになる。千早も春香も歌がアピールポイントなわけだし、俺としては歌番組をなるべく仕事として選びたいと思う」

まあ最初はそう思い通りにはいかないだろうけどな、と日高は苦笑した。ふっと、千早の表情に影が差す。

(・・・・・・)

「よし、それじゃあ早速明日から活動開始だ。と言ってもまだ挨拶回りの予定は決まってるないし、レッスンから始めよう。トップアイドル目指して、頑張るぞ!」

春香と千早を帰し、一人黙々とスケジュール表に向かいあつ日高に、社長は一言「ご苦労だったね」と告げて帰って行った。

出先の社長は夕日に照らされて少し赤みを帯びた色になっていた。・・・どうやったら人はあんな色まで日焼け出来るのだろうか。

「あのー、日高さん。ちょっといいですか?」

遠慮がちな声がオフィスに届く。振り向くと小鳥が手を拭きながら給湯室から出てくるところだった。

「あ、小鳥さんお疲れ様です。片付けの手伝いですか?」

「いえ、そうじゃなくてちょっと・・・千早ちゃんのこと、お話が」

そうして応接室のソファに「ちょっときゅーけい」と口ずさんで腰を下ろした。

「あの子たちをユニットとしてデビューさせるって聞きましたよね?」

「ええ、そのつもりですが・・・何か、まずかったですか?」

「そういう意味じゃないんですけど・・・」

と切り出した小鳥は、神妙な面持ちで話し始める。

「私の個人的な意見なんですけど、あの子たちって、まったく正反対だと思っんです。ユニットを組むとしたら多分もっと・・・春香ちゃんとなら明るくて元気な子、逆に千早ちゃんとならクールな子と組んだほうが、ユニットとして成功しやすいんじゃないでしょう



か？」

「・・・・・・」

日高は不気味にも黙りこくりながら、手はせかせかと鞆に資料を入れ始めている。

「え、あつ！こ、これはさつきも言いましたけどあくまで私の個人的な意見で、日高さんの考えとか私あまりわからないものですから・・・・！」

「いえ、俺もそう思ってますよ。春香と千早は今、アイドルとしての相性はそんなに良くないですし」

「だから出しやばった意見とか・・・・はい？え、じゃあなんで・・・・」

「日高から出た予想外のセリフに小鳥は狐につままれたような顔をする。」

「多分社長も同じことを思ってますよ、小鳥さん。だけど俺はあいづらをユニットとして出す以外の考えはありません。今のところ見えている最終目標もありますし」

「さ、『最終目標』？トップアイドルとは別の、ですか？」

「これ以上はだめですよ、いくら小鳥さんと言えど教えられません。まとめた荷物を持ち上げて、「お疲れ様です、小鳥さん」と一礼してから事務所を出て行った。」

「あつ、ちょ、ちょっと待ってください！最終目標って・・・・行っちゃった。それにしてもなんでわざと相性が合わない二人を組ませてる？『最終目標』っていうのもなにかわからないし・・・・」

「日高さんのケチーっ！！」そんなセリフが商店街全域にこだました。

同時刻。

千早は戸惑っていた。

春香に連れられたこの公園で、何故か当の春香は一向に口を開く  
うとしない。

（話にくいこと、なのかしら。私から話しかけたほうが？）

でも、「話したいことがある」という春香の目は真剣そのもので、  
自分から切り出してしまつていいものなのか、そんな懸念が千早の  
頭をぐるぐる回る。

「・・・わたし、おせっかいしちやったかな？」

「え？」

ベンチに座つてから約五分。やっと口を開いた春香の口調には、  
先程のミーティングのときのような澁刺さは消え失せ、一回りしぼ  
んだふうだった。

「おせっかい？春香が、私に？」

千早の問いに、春香は黙つて頷く。

何のことだろう。千早にはその覚えがまったくなかった。

「わたし、あのときの歌聞いた瞬間からどうしても千早ちゃんと歌  
いたくなっちゃつて・・・こんなに歌が上手な人の隣で歌えたらど  
んなに楽しいかなつて」

「・・・・・・」

春風がすつと目の前を吹き抜ける。二人の髪がさらさらと横靡き、  
それにつられるように千早は立ち上がり、すたすたと広場へと歩い  
ていく。

「でも、ごめんなさい！・・・それってわたしのことしか考えてな  
くつて、千早ちゃんはいドルには興味ないつて言つてたのに無理  
やり引つ張つてきちゃったんだよね・・・」

春香は相変わらずうつむいているが、声色に表情がありありと浮  
かんでいる。それを察してか千早は初めて自分から言葉を紡いだ。

「・・・春香、それなら私も言うことがあるの」

「え・・・」

広場で踵を返す。千早の姿が夕日に照らされてきらきらと赤く輝  
いていた。口元にはかすかな微笑。

「ありがとう。もしあなたがあの時、ああ言ってくれなかったら、私はチャンス逃すところだった」

「あ……え？」

顔を上げた春香からは険しさが消え、しかしいまだ笑顔は見えない。千早の言葉は春香の脳内で何度も再生される。

（ありがとう……？なんで千早ちゃんが、わたしに？）

「伝説的ボーカリスト『日高舞』。私の目標はその人なの。小さい頃に彼女の歌を聞いて、それから歌が好きになった。ラストライブはビデオにも撮ってあるし、『Alive』だって何度も聴いてるわ」

「……いつか彼女みたいに歌を歌いたいって、ずっとそう思っていたの。」

千早は過去を反芻するように視線を中空へと投げながら話す。

そんな彼女の姿は不思議な魅力に満ちていて、まるで違う時間軸に身を投げいれているような千早の表情に、束の間春香は、千早がそこにいるのにそこにいないような、奇妙な錯覚にとらわれた。

「『日高舞』の元プロデューサーである彼の元にいれば、きっと私が歌うべき歌のヒントを得られるかもしれないから……アイドルに対する興味はまだ沸かないのだけど、私には、歌しかないから」

こんなこと言うのは春香に失礼だけど、と千早は苦笑いを浮かべた。

その時、春香にふと疑問が浮かんだ。

千早は『日高舞』に近づくために彼の元でアイドルを始めた。かく言う春香も舞に憧れてアイドルを目指そうとした一人だ。けど、春香には『歌が好きだから歌う』というおぼろげながら自信を持てる理由がある。

ならば、千早は？

千早はたとえば、『日高舞』に並んだとして、そしてそれからどうしたいのだろう・・・？

## その2『e・S誕生』（後書き）

ちなみに作中に出てくる『E・S<sup>エス</sup>』だったか『e・s<sup>エス</sup>』だったかの映画（本物の名前を忘れた）は本当にあります。

うp主は見ずにパケの裏側を見ただけに留まりましたが、あれはどんな映画なんですかね？レンタルの棚には他にホラー物とかが一緒に並んでましたが。

春香さんが見たのはきつと携帯がプルプル鳴るアレじゃないでしょうか、そのあたりのご想像は読者様にお任せいたします。

余談ですが、動画の時もいつも一話あたりこのぐらいの長さのストーリーを入れていくつもりです。どう見ても薄いのがより薄くなるけど。

映像描写がどうしてもうまくならない・・・まあ、仕方ないね。

### その3『春香にとって、千早にとって』（前書き）

三話目でございます。

ちよっと台詞の掛け合いばかりで情景がうまく書けませんでした orz

まあ今の自分には改良の腕がないのでこのままにしておきます。

さて今回は私の大好きなシリアス（笑）っぽい何かで書いてみました。

内容のほうについては、後書きにて少しばかり書かせていただきます。

### その3『春香にとって、千早にとって』

きっかけは六歳か七歳だった頃、深夜に起きてしまいやることもなくテレビをつけたことだった。

深夜帯のテレビなど見たこともなかった千早は、親も寝ている時間に起きているという背徳感、とでも言えばいいのだろうか。そんな感覚に後押しされながら画面の前で膝を抱える。

目の前で流れている番組は、アイドルが半分セクハラ紛いのゲームをしながら、それをクリアした一人のみが自分の曲を歌うことができるという典型的なアイドル番組だったのだが、途中から見始めた千早がそんなことを知るはずもなく。

勿論当時の千早を惹き付ける深夜番組などこれも含めて存在せず、五分ほど経って飽きが来たのか、眠気の戻ってきた彼女は薄眼を擦りながらテレビを消して自室へと帰ろうとする。

その時だった。

画面脇で不満そうにしていた少女（とはいえ千早よりも数段年上だが）から『話が違う』と怒号が飛んだのは。

どうやら自分の曲をワンフレーズしか歌わせてもらえなかったことが不服だったらしい。

丁度スピーカーの近くにいた千早の耳を射抜いたその声に、彼女はとうしたことが改めて画面の前に先程より近い位置を陣取って腰を下ろす。

当然このクレームが実を成すことはなかったのだが、それでも千早には彼女の名前が深く刻み込まれることになる。

それから彼女について調べ始め、番組を録画しては視聴し、ついには弟をも巻き込んで。

彼女に、彼女の声に、彼女の歌に魅入られていった。

それが如月千早とアイドル『日高舞』とのファーストコンタクト。

日高家の午後二時は、いつもの二人に加えて客人二人を招き入れる珍しい形で始まった。

「・・・ど、どうですか・・・？」

テーブルの中央にはクツキーの広がった器。てっぺんに乗った一枚をつまんで、舞はそれを口の中に放る。

「んっ・・・うん、おいしいじゃない！やるわね春香ちゃん」

「あはっ、あ、ありがとうございます！・・・ほら、千早ちゃんも食べて食べて！プロデューサーさんも！」

「え、ええ・・・ありがとうございます」

もう一枚、と取る舞を見て安心したのか、緊張しているのか全く動かない千早に春香はクツキーを勧める。

「・・・春香、楽しそうだなあ・・・」

どうしてこんなことになっているのか。事の始まりは一時間程度前に遡る。

「プロデューサーさん！お昼休みですよ、お昼休み！」

「・・・うん、おはよう春香。今日も元気だな」

営業から戻ってきた日高は、視界いっぱいに入ってくる春香を軽くないしてデスクへとついた。

「・・・って、え？それだけ？」

「他になにかあったっけ？」

「あるじゃないですか！今日千早ちゃんも来てるんですよ！？」

「いや、今日はレッスンも仕事もなかったはずだぞ？」



名指しされた千早は本に落としていた目を上げて、日高と目を合わせるなりヘッドフォンをとって一礼し、また自分の世界へと帰っていく。

ユニットの相方にまで捨て置かれ、そうじゃなくってー！と春香は独り相撲。

五月某日。デビューから約一月半が経ち、この一カ月で若葉から深緑へと成りゆくように・・・とは行かず、なかなか難航したアイドル活動となっている。

千早の歌はなかなか春香のそれと合わず、何より最初に選択したのは『太陽のジェラシー』という正統派アイドル楽曲なわけで、千早はあまり乗り気ではない。

その上で春香の歌は何というか・・・個性的なのだ。ものすごく上手下手を超越した何かを時折感じるほどで、そういった要因も絡まってか、思い描いていたようにはファン数は増えないでいた。

「プロデューサーさん、今日は何曜日ですか？」

「うん、木曜日だろ？・・・あれ、平日じゃないか。二人ともなんでここに？」

「はあ・・・やっと気づいてくれた・・・」

春香の遠距離通勤の問題もあり、仕事の少ないこのランク時期は活動なるべく土日絞っていたおかげで、日高は彼女を見た途端に今日が休日だと勘違いしていたらしい。

「えっへっへ、実はここ一週間は、わたしも千早ちゃんもテスト期間なんですよー」

「テスト期間？」

「はい！だから学校が半日で終わっちゃって暇なので、事務所に来てみたんです！」

「来てみたんです！って距離じゃないだろ・・・。俺はこの後少ししたら営業に行かなくちゃいけないし、別にいてもやることないと思うけど。ただの打ち合わせただけが付いてくるか？それともレッスンでもやる？」

日高の提案に軽く首を振った春香は、何を考えているのか不敵な笑みを浮かべながら、

「んー、それよりも。プロデューサーさん！お昼休みですよ！お昼よ」

「春香、それじゃあ伝わらないわよ。せつかく持ってきたものもあるんでしょ？」

「あれ、千早。それはもういいのか？」

「これは趣味のクラシックを聴いていただけなので。プロデューサーも後で聴きますか？」

「んー、いや、聴くときは自分で借りて聴いてみるよ。それより春香、さつきからどうしたんだ？やけに昼休みを強調してるけど」

「えつとですねー」

日高の問いに春香は言葉ではなく、かばんの中から袋詰めのカッキーを取り出した。

二十枚程度入っていそうなそれはすべて綺麗なハート型を象っている。そういうえば趣味に『お菓子作り』なんて書いてあったなあ、などと思いつく日高。

「ん、誰か誕生日なのか？」

「違いますよー。遅くなっちゃったけど、舞さんにお礼がしたいんです」

「それで、せつかくだから一緒に来ないかと春香に誘われて」

「お礼？初日のことか？だったら俺が今日渡しておくよ。・・・あれ？」

クッキーに手を伸ばそうとするが、春香は不服そうにそれを下げる。

「違いますよ、日高さん」

「ああ、小鳥さん。聞いてたんですか？」

「そりゃあれだけ大声でしゃべってたら、聞きたくなくても聞こえますよ」

そうして持っていたお盆を給湯室に戻してから、「春香ちゃんた

「ちは舞さんに会いに行きたいんですよ」と自信たっぷりに断言した。  
小鳥のセリフに二人は頭を上下に動かす。

「二人ともお休みだから営業に連れていく予定組んでないんじゃないんですか？」

「まあそうですね・・・舞が家にいるかどうかもわからないしなあ・・・」

「あ、それならわたしがさっき電話で聞きましたよ？」

「春香、なんで知ってるんだ・・・ってそうか、お前は舞に一回会ってるもんな」

その時に番号交換でもしたのか、まったくちゃっかりした奴だ。

「・・・はあ、仕方ない。今日は二人とも仕事もないし、春香にいたっては四時間が無駄になっちゃうしな。けど、今回だけだぞ？」

「はぁーい！」

「はい、ありがとうございます」

春香は日高の声に顔を綻ばせた。心なしか千早の口元にも微かに笑みが見える。

「・・・ま、たまにはこういうのもいいか。

ここ最近上手く行かなくてモチベーションが下がってたみたいだし、こうして笑ってくれるならそれに越したことはない。

オーディションが不振な今、営業に力を入れないと彼女らは芸能界からフェードアウトしていくことになる。そんなことはさせたくない。

だが結局は彼女らのモチベーション次第。それを管理するのもプロデューサーとしての義務。そのためには。

「・・・少しでもいい仕事、持って来てやらないとな。

胸の内、堅く決意しなおす日高であった。

「・・・って、ゆっくりしてるけど嶺司さん。時間はいいの？」

「お、そろそろ出たほうがいいな」

回想を終えた日高は時計を見やると、長針は丁度「3」を過ぎたところ。

話があるということ一度事務所に戻ってくるようにと高木に言われている。営業まで時間はあるが、話にどれほどの時間をとるかわからない。余裕を持って行動するのが無難だろう。

「春香、千早。俺は行くけどゆくりしていつてくれ。あと、迎えに来たほうがいいか？終わってから事務所に戻るから少し遅くなるけど」

「大丈夫ですプロデューサー。もう道は覚えましてし、二人でも帰れますから」

「え、千早ちゃんもう覚えたの？」

「春香、二回目なんじゃないの？」

「その……最初のが全部曖昧だったから……それにこのあたり住宅街だから道が覚えづらくって……」

「……本当に大丈夫か？」

日高のこめかみがすうーっと冷える。千早は呆れかえりながらも

「私が一緒にいるから」と春香を励ます。

「私が送ってあげたらいいんじゃない？」

「愛が帰ってくる時間になるだろ？舞は家にいてくれ、な。あいつのことだから鍵忘れてるかもしれないし」

「うーん……」

クッキーを運ぶ手を止めて、少しばかり考え込む。すぐに答えは出たものの、舞は不満げに、「……はあ、わかったわようと呟いた。

「それじゃあ舞、後は頼んだ。俺は事務所に行ってくる」

「はいはい、行ってらっしゃーい」

「プロデューサーさん、頑張ってくださいーい！」

「よろしく願います、プロデューサー」

「しゃーちょー。日高さん遅いですねえ」

社長室からひよっこりと出て来た高木に、小鳥は思い出したように問う。

「まあまあ小鳥くん、まだ彼が事務所を出てから一時間も経ってないんだぞ？昼食を兼ねていたはずだし、もう少し遅くても問題はないさ」

「けど社長、日高さんに話があるんじゃないですか？」

コーヒーを一口飲んだ小鳥だったが、眉間に皺を寄せながらそれを避けるようにして口から外す。

（に、苦・・・）

粉末を入れすぎたせいかわからないが、とんでもなく濃くなっていたようだ。

すぐさまミルクを持ってこようと席を立つが、丁度切らしていたことを思い出し、仕方なく元の位置に戻った。

「うう・・・その話って春香ちゃんたちのことですよ。時間足ります？」

「うん？何の話だね」

「え？だから春香ちゃんたちの調子が上手く行っていないことですよねって」

「ああ、そういうことかね」

社長は「ふむ」と鼻を鳴らす。

「日高くんの方針については心配していないよ」

「ええ！？な、なんですか？調子はどう見てもよくないですし、少し軌道修正とか・・・」

「プロデューサーは彼だからねえ。彼女らを一番近くで一月半も見ていた日高くんが、それに気付かないはずがない。それでも変更しないのなら、彼にはなにか考えがあるのだろう」

それでも事務所に収入があまり入らないのは困りものだがね、と

高木は苦笑した。

「それより私が気になるのは如月くんのことなのだよ。小鳥くんは今まで彼女を見てきて、どう思うかね？」

「え？どうって・・・歌は上手ですし、容姿端麗ないい子だと思いますけど。あ、でも、十五歳っぽくないような気がします。大人びすぎているというか」

普段の風景を思い返してうーんと唸る。春香ちゃんのほうが子供っぽいのかしら、と一瞬考えたが、それは隅に追いやった。

「やはりそう思うかね。余計な詮索はするものじゃないんだが、どうしても気になってね。とはいっても私は何も知らないし、日高くんに少し訊こうかと思ったのだよ」

「ふーん・・・。プロフィールには母子家庭って書いてあったし、何かと難しい環境ですから、そう言った事情があるのかもしれないですねー」

「只今戻りましたー！」

「おお、日高くん！丁度いいところに帰ってきたね。早速話を始めようじゃないか」

勢いよくドアが開く。帰ってきた日高に意気揚々とした高木の声がかかった。

会議室へと向かった二人を見送って、小鳥は一人机を探り、一冊のファイルを取り出す。

『如月千早 家族構成・母一人』

（大人びてる・・・というか、必要以上に自分を押し殺している感じがするのよね・・・気のせいかしら？）

答えを出すには情報が少なすぎる。だがもしかしてこれが日高の言っていた目的に関係しているかもしれない。

好奇心はあれども手が出せない。なんともどかしい状況に耐えられず、小鳥は持っていたカップをひと思いに呷った。

「・・・苦いっ！！」

「あの、舞さん。訊きたいことがあるのですが・・・」

一方。のんびりとした午後のひと時を破いたのは、少しばかり震えながらも透き通った声だった。

千早の堅い一言に舞は「なあに？」と、いかにも緊張感なげな反応。

「舞さんがなんで『アイドル』をしていたのか知りたいんです。あれだけの歌が歌えるなら、ボーカリストでもよかったのではないかなと思って」

「ち、千早ちゃん・・・直球だね。わたしちょっとびっくりした」その言葉に一瞬、春香の顔が強張った。

それもそのはずだ。憧れの大先輩に向かって突然のこの発言。下手をすれば失礼とかそういうレベルでは済まされない。

「ん？私がアイドルをやってた理由？」

しかし意に反して舞は表情を変えず、それどころかクッキーを一枚放りこむと、

「これといった理由はないわよ？」  
と一言に伏した。

「え・・・？な、何かに憧れて、とかそんなのもないんですか？わたしも千早ちゃん・・・はちょっと違うけど、舞さんに憧れて・・・」

「あー、というよりは、私たちの前ってそういう『アイドル』があまりいなかったから、憧れる対象がなかったのよ」

九年前当時の情景を思い返しながら舞は「うん、やっぱりなかったわね」と呟く。

春香は話の流れが落ち着いたことにホッとしたのか、ずっと手つかずだったアップルジュースに口をつけた。

「それじゃあ、舞さんは何故アイドルに？」

千早はなおさらわからないという風に怪訝な表情。声色にも困惑が見て取れる。

「んゝゝゝよく覚えてないから何とも言えないわね」

けど、と舞は間を置いて。

「私らしい理由っていったらきつと『楽しそうだったから』なんじやないかしら。多分それ以外だったらアイドルやってないだろうし。千早ちゃんは、楽しくない？」

「・・・楽しいとか、そういうのはまだ私には、よくわかりません・・・。けど、ずっと目標だった『日高舞』の元プロデューサーに出会えたのは、奇跡だと思っています。きつとこのままやっていけば舞さんのいう楽しさも、少しずつわかってくるのかもしれませんが」

「そ、そうだよ千早ちゃん！お仕事とか増えていけば、きつと楽しいから！」

「んゝゝゝ千早ちゃんは歌が歌いたいのよね？」

二人のやり取りにどこか違和感を覚えたのか、舞は少し顔をしかめながら割って入る。その問いに千早は迷うことなく首肯した。

「なんで歌いたいの？」

「そ、それは勿論あなたに追いつくためで」

「私を追ってて、千早ちゃんはそれで楽しい？」

「えっ？」

「ま、舞さん？」

二人は虚を突かれて言葉を詰まらせる。そんな二人はお構いなしで舞は言葉を続けた。

「じゃあもし千早ちゃんが私みたいに歌えるようになって、その先には何かあるかしら？」

「その先・・・？」

そう、その先。そう言いながら舞は空になった器を下げるために席を立つ。

「もし私みたいな歌い方をして、全部完璧に真似したって、そこにあるのはきつと『日高舞に「よく似た」歌』。私のすぐ後ろに千早



ちゃんがいるだけで、私はきつと越えられない」

「そ、そんなことはありません！きつとその先だつてそこにたどり着けば……」

「見えるつて、本当にそう思う？そこに千早ちゃんはいないのに」  
「……………」

「あ、あの舞さん、もう……」

千早の叫びを背で受けて、返した言葉に千早は小さくなる。

『日高舞』を目指してずっと頑張ってきた千早だ、この言葉によるダメージは計り知れないものがある。春香は背中がじつとりと湿る感覚を覚えた。

「そこできつと止まっちゃうと思うの。それつてすごく苦しいことよ。自分の可能性を自分で潰しちゃうてるようなものだから」

「……なら私は、どうすればいいんですか？」

うつ向き気味な千早は、新たにジューズの入ったバックを持って戻ってくる舞に問う。

「私には歌を歌うことしかできないんです。あなたに憧れて歌い始めて、それでそれを否定されたら……！」

「誰かに憧れることが悪いなんて言つてないわよ、千早ちゃん？」

「……………えっ？」

ふつと顔を上げる。千早の前には先程の難しい顔などなかったかのように、柔らかな表情をした舞がいた。

「アイドルっていうのは憧れられるためにいるようなものだし。だけれど千早ちゃん、あなたに『日高舞』の姿を求めている人なんていない。だから私は越えられない。それはわかる？」

「……………」

「だから、千早ちゃんは『千早ちゃん』になればいいのよ。自分らしく、自分のために。そのほうが絶対楽しいから。それに、私も『日高舞二世』をみたいなんてこれっぽっちもおもつてないからね。それじゃ私がつまらないもの」

人差し指と親指を間を少しばかり開けて見せ、舞はにっこりと笑

った。

『楽しい』

舞はこの単語を何度も何度も繰り返す。

楽しい？アイドルをすることが？歌うことが・・・？

「ね、春香ちゃん。笑って歌えるアイドルと、そうじゃないアイドルだったら、春香ちゃんはどっちになりたいかな？」

「わ、わたしですか！？え、と・・・できれば笑ってるほうがいいかも。わたしが楽しく歌ってなかったらきつと、ファンの人に元氣なんてあげられないし」

「ふふ、それでいいの。ねえ、千早ちゃんはさつき嶺司さんに会えたのが『奇跡』って言ってたけど、奇跡なんてただのきっかけよ？アイドルが『楽しい』って思うようになるか、そうじゃないか。その奇跡をどう使うかはあなたたち次第なんだから」

（歌うことが楽しい・・・今は、楽しくない・・・？）

「ん？千早ちゃん、何か言った？」

「あ、ううん。なんでもないわ、春香」

口に出ちゃったかしら、と千早は前に向きなおす。

ずっと歌うことが好きだった。

今だって、これからもずっとそうだと思ってた。

けど舞さんに追いついて、それでどうするの？

舞さんの見られなかったものはそこにはない。

私が見たかったものも、きつとそこにはない。

だとしたら私は、何のために歌を歌っているの？

いつからだろう。

いつから私は、歌を楽しいと思わなくなっただんどう

。

「舞さん、今日はありがとうございましたあ！」

空が赤く染まり始める。夕焼け小焼けが鳴り始めて、住宅街に四時を告げる。

玄関で履き具合を整えながら、春香は笑顔でそう言った。

「二人ともこれからたまに来てくれてもいいのよ？この時間っていつも暇だし、今日楽しかったし。あ、春香ちゃんはクッキーまた作ってきてね」

「あはは、気に入ってもらえてよかったです」

「舞さん、私は・・・」

「ん？どうしたの千早ちゃん？」

「・・・いえ、なんでもありません。春香、そろそろ帰らないと」

「あ、そうだった！それじゃあ舞さん、さよなら！」

「ええ、アイドル頑張ってるね」

慌てた様子の春香はそそくさとドアを開けて出ていく。それに続こうとした千早だったが、

「あ、千早ちゃん。ちょっと待って」

「はい？」

それを舞の言葉が引き留める。ドアにかけていた手を戻し、ゆっくりと振り返った。

「千早ちゃんは歌が好きなのよね？歌うためだけにアイドルになったぐらいだし」

「はい、まあ」

「だったらきつとあなたにもあつたはずだから。歌ってて楽しいと思っていたことが」

「っ！聞いて、いたんですか？」

「ごめんね、私は千早ちゃんとの話に集中してたから聞こえちゃったの。その頃を思い出せなんて言わない。だけど、認めてあげてほしいの」

「認める・・・何をですか？」

ドア外から春香の声がする。きつと千早を急かしているのだろう。

けどそれが聞こえたのは舞だけで、千早には聞こえていなかった。  
「なんだろう・・・『本当の自分』、っていうとわかりづらいかも  
しれないけど・・・歌って楽しいって思っている自分を、ちゃんと  
認めてあげなさい。それが千早ちゃんにとって今、一番大切なこ  
とだと思うから」

「・・・はい」

短く一礼だけして、ドアを開く。

こりやちよつと大変なんじゃない、嶺司さん？

閉じていくドアを見送りながら舞は一人、そんなことを思っ  
た。

「ふむ、それではキミの最終目的とは・・・」

「ええ、そういうことになります。勿論二人が望まないのであれば  
その限りではないですけど・・・私の目標はそこです」

765プロの会議室。高木と日高の間には、得も言われぬ割り入  
りがたい空気が漂っており、

（うつ・・・ど、どうしよう。お茶を届けに行くついでにちゃっか  
り話を聞いちゃうつもりだったんだけど・・・そんな空気じゃあな  
いわよねえ・・・）

ここに一人の野望が崩れ去ろうとしていた。

小鳥は薄く開けたドアの隙間から、ちらちらと中を窺う。部屋に  
差し込む赤い西日は、二人の影を一層黒く塗りつぶしていた。

「天海くんと如月くん。二人を組ませてからもうすぐ二カ月経つが、  
そんなところに組ませた目的があったのだね」

「はい。ですがやっぱりそう簡単には行かなくて・・・。千早の歌  
はまだ『あの時』から変わらないままです」

『あの時』って、日高さんと千早ちゃんが会った時のことかしら？  
「気長にやりたまえ、と言いたところだが・・・情けない話だが

こちらのほうに余裕があまりなくてだね」

スケジュールすかすかですからね」。

「春香のほうには少しずつ影響は出てきているんですが・・・千早がいつ春香の魅力に気付くか。それにさえ気付いてくれればきっと何かしらの変化があるはずなんです」

春香ちゃんに影響？最近妙にボイスレッスンに励んでることとか？でも千早ちゃんに春香ちゃんが影響を与えるってどういうことかしら？

「ううむ、少しのきっかけさえあればいいのだが・・・小鳥くん、いい加減覗いてないで出て来たまえ。こっちは丸見えなのだから」

丸見え？なんのことかしら・・・。それに今私、呼ばれたような・・・ん？

「・・・いつからばれてました？」

「ドアが少し開いたときからだ」

「最初からじゃないですか！先に言ってくださいよ」。お茶、冷めちゃったじゃないですか」

「そんなになるまでそこにいたんですか・・・」

淹れなおしてきます、と踵を返す小鳥を高木が呼びとめる。

「まあまあ、丁度冷えたお茶が欲しいと思っていたところなんだ。持って来てくれたまえ。それに小鳥くんも一人だけ仲間外れでは不満だろう？」

「日高さんは教えてくれませんでしたけど？」

口を尖らせてむすつとふくれる小鳥に、日高はがばつと立ち上がる。

「いや、違いますよ！？仲間外れにしたかったわけじゃないんですが・・・小鳥さん、口軽そうですから・・・」

「失礼な！私は御近所様からめっぼう口が堅いつて評判ですよ！」

「・・・小鳥くん。私も日高くんに少しばかり同意するものがあるよ。と、その話はいいいから落ち着きたまえ」

手をわたたさせながらの謝罪も無駄に墓穴を掘るばかり。見兼ねた高木は二人を仲裁し、対面のソファに腰を下ろさせた。

「まったく・・・まあ、話を続けようか。この件は二人にばれては意味がないからね。聞くからにはそこところよろしく頼むよ、小鳥くん？」

「なんか釈然としないですけどわかりました。それで何なんですか、日高さんの目的って・・・」

会議室に影がひとつ増える。日高の言葉に神妙な顔をして聞き入る小鳥は、そのセリフに耳を疑った。

「くっしゅん!!」

二人揃った見事なくしゃみ。日高家から帰りの道中を行く二人は何を感じたのか辺りをきよきよと挙動不審に見回す。

「千早ちゃん、風邪ひいた？」

「春香こそ。それにしても二人揃ってなんて・・・そんな季節ではないと思うのだけど」

「ひよっとして誰かが噂してるのかも。ファンの人とか！」

「ふふ、だとしたら舞さんとかは大変そうね。それでどうするの？事務所には戻る？」

「んー、プロデューサーさん戻ってきてるかわからないし、メールだけ入れて帰ろっか」

言うが早いか春香は携帯を取り出して、指をピコピコと動かす。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・春香、訊いていいかしら」

「んー、なーに？」

歩みを止めた千早に気付いて、春香はくるりと振り返る。

「春香は『本当の自分』って、何だと思う？」

「んー、ふーん？・・・舞さんに言われたんでしょ」

「よくわかったわ・・・んえ！？」

千早の両頬をつまんだ春香の手。

まーるかいてちよん、まーるかいてちよん。そう言いながらあちらこちらに伸ばしたり縮めたり。

春香は「わかるよう」と一言呟いてから、名残惜しそうに柔らかい頬から手を離す。

「だって千早ちゃん、日高さんの家出てからずっと難しい顔してたよ？」

「・・・そんなに？」

こくりと頷いた春香は、千早の真似とでもいつかのように目じりを釣り上げる。

「こんなになつてたもん」

「もう、そこまではなつてなかったでしょう？で、どうなの？」

「本当のわたしだっけ。今のわたしがそうなんじゃないかな？」

「え？」

「舞さんに憧れて歌が好きになってアイドルになって、それでもEランクから先に進めない今のわたし。未来はわからないから本当の自分はまだいないと思うし。千早ちゃんはどう思ってるの？」

まるで光と影だ。二人はくつつきながらも交わることのないそれのように、まるで対照的な心境だった。

「・・・わからないわ。けどそうやって自分を信じて前に進める春香は、すごいって思う」

「前に進むなら千早ちゃんだって同じだよ！ずっと歌の練習してきたから、そんなに上手になった歌があるんでしょ？」

天真爛漫な笑みを浮かべる春香を直視できずに、千早はふいと目を逸らした。

『もし千早ちゃんが私みたいに歌えるようになって、その先には何かあるかしら？』

きつとあるはずなのだ。千早自身が探していた何かがそこにはあったはずなのだ。いや、

あると無理やり思い込んでた？

『そこに千早ちゃんはいないのに』

その通りだ。その先にあるのはきつと『舞が見られたかもしれないもの』で、千早のものではない。

その点、春香は違う。自分の中の歌に対する想いを迷わず歌にぶつけることで、あの明るい歌は成り立っている。だとしたら彼女は今歌うことで精いっぱい、未来や過去など気にすることもできないのだろう。

彼女の言っていたことは的外れに見えて、意外と核心を突いているように思える。

『歌ってて楽しいって思っている自分を、ちゃんと認めてあげなさい』

私の中にもいたのだろうか。あつたのだろうか。いや、

歌は好きだ。今でもそう思っている。

けど、大切な何かをどこかに置き忘れているような気がするのは何故だろう。

頭上、初夏の夕焼けはじりじりと闇に支配されつつあった。



### その3『春香にとって、千早にとって』（後書き）

舞さんはいつも通りです。

そんな舞の姿に二人が何を抱いて、これからどう変化していくのか。これ（このシリーズ）を書く前にふとわかったのが、アイマスのキヤラクターには二種類いるということでした。

目的があって歌を歌う者。それが例えばかわいらしくなるためであったり、自分を認めさせるためだったり、運命の人に見つけてもらうためだったり。

反対にそれを持っていない者。歌が楽しいから歌う、面白いから歌う。

後者に当てはまるのが自分では『春香・亜美真美』の二人（舞を含めて三人？）しかないないと思っていて、本当に強いのはそういう子なんだろうな、と感じています。

長文失礼いたしました。

#### その4『緩やかな休日の、緊迫した過ごし方』（前書き）

更新が遅くなって申し訳ありません・・・。

さて、春香たちもDランクに上がってこれからが正念場ですね（リンクアップ期間的な意味で）。そんな彼女らですが、休日だってあります。遊びたい年頃なんです。

今回はそんな緩やかな話から始まった、よくわからないお話。

#### その4『緩やかな休日、緊迫した過ごし方』

とある夏の日曜日、午前十時。

いつもならばプロデューサー活動に勤しんでいるはずのこの時間だが、今日は珍しくオフとなっている。

朝食を済ませ、少しばかり街でも歩いてみようか、と日高は早速今日のスケジュールを立てる。

しかしそれは小刻みな振動音により阻害された。

「ん・・・？メール？」

そうしていつもと変わらないはずだったその日の朝は、奇妙な文面を迎え入れることから始まった。

『プロデューサーさん！日曜日ですよ、日曜日！』

「・・・・・・・・」

もはやすっかり眠気の醒めているはずの目をごしごし擦り、そうして何事もなかったかのようにパクン、と閉じた。

~~~~~

「・・・・・・・・」

その直後、聴き慣れた着信音が耳に伝わる。

1コール。妙な予感を覚えながらも携帯を開く。

2コール。表示された名前はつい数十秒前に見たそれだ。

3コール。メールの文面を思い出す。

4コール。おそらく言われるであろう内容を想像しながら、

「もしもし」

日高は通話ボタンを押した。

『プロデューサーさん！日曜日ですよ、日y』

「それはもう見たから・・・」

『じゃあ返事してくださいよー』

不満そうながらもどこか弾んだ声の春香。

ここ最近Dランクアイドルとして少しずつ忙しくなってきたので、

たまの休日がうれしいのだろう。

千早もこの日は休みたいと言っていたので迷うことなくここにオフを当てたのだが・・・アイドルとして人前に出ている身とはいえ、やはり春香も年相応の女の子らしく、休日を楽しもうとしているらしい。

「と言われても見たのついさっきだしなあ。・・・なんだか後ろが騒がしいんだけど、外にいるのか？」

春香の声が時折周りの雑音で聞こえなくなる。この音は・・・車か？それに信号、人も多いな。

『はい！せっかくのお休みですから、中心街でいっぱいお買い物したいなっと思って！』

「いいじゃないか。これから忙しくなりそうだし、今日一日は目一杯リフレッシュするんだぞ？・・・で、なんで電話したんだ？今友達とかと一緒にだろ？」

『そう、それですよプロデューサーさん！！』

突然の大声に日高はとっさに耳を離す。

『誰も一緒に来てくれなかったんですよーっ！みんな用事あるって言ってーっ！！』

キーン！と一瞬金切り音が通り抜ける。反射的に電話から半歩身を引いた日高だったがダメージは甚大。少し目を閉じて、そしてまた電話口に戻った。

「わ、わかったから落ち着け。・・・じゃあ千早は？って、そういえば今日に休み入れたがってたの千早だったなあ」

『念のため電話してみたんですけど、やっぱりどこかに出かけるみたいですよ』

「・・・それで、俺に電話したわけね」

街にいて一人っぺというのは寂しいよなあ・・・。

休みの中心街は人が多い。そんな中で女子高生の春香が一人でいて何が楽しいわけでもないし、むしろ周囲の状況如何では逆にストレスが溜まりかねない。

それにプロデューサーとして、所属アイドルを一人で放っておくわけにもいかない。

「わかった。それじゃ俺も準備するから、事務所まで来てくれるか？ ああ、あともしかしたら連れが一人いるかもしれないけど、いいか？」

『全然オツケーですよ！むしろ大歓迎です！じゃあ十時半ぐらいに行きますからー！』

「あ、おい春香！事務所行くまで俺三十分か・・・一方的に切りやがった」

声の途絶えたことをもう一度確認してから終話、早速と日高は部屋を出て二階へ向かう。目的はただ一人。

「愛ー？ いるかー？」

コン、と扉を叩いてから開けてみるが中はもぬけの殻。

おかしいな、土曜日だったら二度寝とかしてても不思議じゃないんだが。

起きたときのままにしてあるのか、無駄に汚くなっているベッドを少し手直ししてから下に降りる。

「愛なら遊びに行っちゃったわよー」

リビングに入った日高に、覆いかぶさるように間延びした口調で舞は告げた。

「そうなのか？」

そう、というそっけない返事とともにテレビのチャンネルが変わる。正面のソファに座っている舞はつまらなそうにリモコンを握りながら、振り返らずに日高に返す。

「学校の友達とね。えっと・・・やよいちゃんだったかしら。嬉しそうに出て行ったけど」

「タイミングが悪かったなあ。ま、そういうことなら仕方ない」

「私は行っちゃだめなの？」

「・・・何しに行くかわかってるのか？」

「全然」

「・・・」

「冗談よ、冗談。私今日用事あるもの。春香ちゃんのお買い物も楽しそうなんだけどね。ちゃんと春香ちゃんの面倒見てあげないとだめよ、プロデューサー？」

「わかってたんじゃないか・・・ってあれ、なんで知ってるんだ？」

「電話、春香ちゃんだったんでしょ？街にいるって言ってたみたいだし、買い物以外に何かすることある？」

「映画とか」

考えてなかった、と舞は思ったより素直に答える。

「はぁ・・・ま、プロデューサーとして荷物持ちにしっかり精を出させていただきますよ。あー、そういえば最近三人で出かけてないな。今度の休みにでも出かけるか？どこか行きたい所でもある？」  
うーん、と少し唸ってからプツンと電源を消して、ソファにもたれかかるようにして振り返る。

「そういえば愛がアイドルのライブに行きたいって言ってたわよ？」

「・・・俺にどうしろと？」

「いや、こう・・・」

そう言いながら両手を右から左、右から左と絶え間なく動かす。

「？」

「そういうチケット、社長とかから貰ったりしないの？」

「ああ、そういうこと。前のプロダクションならあったかもしれないけど、765プロはどうかなあ・・・あまり期待しないほうがいいかもな」

貧乏と社長自ら言うほどだ。確かに予算は少ないし給料もそれほど入っては来ない。どうして営業できているかすら、日高でも不思議がつている。他事務所のアイドル資料も大体映像資料だし。番組録画の。

「じゃあ春香ちゃんたちのライブ日程とか教えてよー」

「・・・チケットは自分で買ってくれよ？」

「けち」

「なんでだよ・・・」

まあそう答えるような気はしてたけどさ、と軽く身支度を整える。

「何よー、その溜息ー」

「なんでもないよ。それじゃあ俺は行くから」

買った物に付き合え、ということは持ち物は少なければ少ないほどいい。

春香の言葉を思い出しながら財布の中身だけ確認して、会話から逃げるように靴を履く。

「春香ちゃんによろしくねー」という間の抜けた声が聞こえて、それからゆっくりと玄關扉が閉じた。

街は熱気に包まれていた。

朝は涼しかったのになぁ・・・。

それは別に何かイベントなどがあって盛り上がっているとか、そんな心躍るものではなくて。

「春香、そろそろ・・・」

「プロデューサーさん、もう少しですから頑張ってくださいよー」

「・・・それ、三回目だが」

右手に三種類、左手に同じく三種類の袋をそれぞれぶら下げながら、ふらふらと危なっかしく歩いている日高に、春香は飴をやるどころか鞭を振り回した。

周囲からの憐れむような面白がるような視線が日高に注がれている。

しかしそんなことは意にも介さずゆっくりと前に、前に。目の前にいる少女を追って歩を進める。

外を少しも確認しなかった俺も悪いんだけどな・・・。

当然、その異変に日高が気付いたのは家を出てすぐのことだ。

事務所に行くまでに珍しくバスを利用したのも、原因はこれにあ

る。

「暑い・・・」

これまで影も形も現さなかった『夏』がたまたまタイミング悪く重なったのだ。

正午も近くなり太陽はますますの高みからさんさんと見下ろしてくる。迷惑なことこの上ない。この暑い中荷物持ちをしている自分の身にもなってほしいものだ。

「あと三つぐらい回りたいんですよ」

「・・・さすがに休憩だ、春香。お前は大丈夫かもしれないが俺はもう頭のとっぺんが暑くて暑くて」

周りの高層ビルはこのような場面で役に立ちそうなものだが、生憎の天気、時間帯が合わさって影の少しも出来たものではない。

おまけに普段は心地よく吹き抜けるビル風も、今日に限っては特大のドライヤーと化している。

街に出て三十分。頭頂をじりじり焼く熱線と四方八方から次々襲い来る熱風に、日高は早くも白旗を上げた。

目の前の春香はと言うと、帽子などかぶって涼しげな顔をし、「仕方ないですね」などとこぼしている。

「どこかでお茶します？この辺にいいお店あったかな」

「いやすまん春香、探す気力も俺にはもうない・・・昼時だし、ファミレスでご飯でも食べないか？奢るからさ」

「え？えつとじゃあ、サイリアのミラクルダイナマイトチョコサンデーもいいですか!？」

「ミラ・・・？よくはわからないけど、そこでいいならそうしよう」手放して喜ぶ春香に応じてやりたい気持ちは山々だが、暑さにやられて思うように動けない。

。。  
愛もこれぐらいになったらこういうふうになるのだろうか・

まだ気が早いような気もするが、娘を思い日高は静かに溜息をもらした。



サイ リアは盛況のようだった。

以前来たときの二倍程度の客入りで、避暑に來た客とは反対に店員はめまぐるしく動き回っており、入るのが申し訳なくなるほどだ。さて、そんな空気もお構いなしにテーブルの中央にそびえる巨塔

『ミラクルダイナマイトチョコサンデー』の処理にかかった春香だった。が、どうやら予想以上の物量だったようで、今はスプーンを置いてメロンソーダをおとなしく飲んでいる。

思いもしなかった強敵に遭遇して、命からがら前の村に逃げ帰ったというところだろうか。今は体力を回復しつつ、ゆっくりと敵の姿を観察している。

「すごい量ですよね、これ」

「まあ確かにそうだが・・・珍しいな、春香が甘いものに対して前情報を持ってないっていうのは」

「新発売ですから」

友人の中にもこれに挑戦した人はいなかったんですよ、と春香は再びスプーンを手にする。

「この前営業でこのあたり通った時に見つけたんですよ。それからずっと気になっちゃって、千早ちゃんも連れてきたかったんですけど」

「・・・千早はどんな顔をするだろうなあ・・・」

「ですよー。千早ちゃんって何が好きなんでしょうか」

「そんなこと訊かれてもなあ・・・」

日高にも春香にも、千早は自分のことをあまり話そうとは思わない。人付き合いが苦手なのか、踏み込まれるのを嫌う性質なのかはわからないが。

「そういえば千早も今日は出かけてるんだったな」

「んー、電話ではそんな感じでした。千早ちゃんも学校の友達とお出かけしてるんでしょうか？」

「千早が、ねえ・・・」

普段見ている彼女の姿から、少し想像を巡らせる。

たとえば春香のように買い物を楽しんでいたり・・・。

または喫茶店でおしゃべりにふけていたり・・・。

万が一にはゲームセンターとか・・・。

どれも合わないなあ・・・。

「うゝむ・・・あまり想像できないな。千早が楽しそうに遊んでるところ」

「失礼ですよプロデューサーさん。千早ちゃんだって普通の女子高生で・・・っ！プロデューサーさん、伏せて！」

「は？突然何うつ！？」

ガンツ！と突然額から鈍い音が広がる。向かいの春香に頭を掴まれ、テーブルに叩きつけられたのだ。

「~~~~~！、！？」

「静かにしててください！」

「今ので逆に目立っただろがっ」

「千早ちゃんです」

春香も少し頭を傾けつつ、窓側を指さす。その向こうには街中を歩く千早の姿があった。

「・・・噂をすればなんとやら、だな」

「夏の虫ですね？」

「『影』、な」

「・・・」

どうやら素で間違えたらしく顔を真っ赤にする春香は、照れ隠しなのか残ったサンデーを猛スピードでかきこみ、勢いよく席を立ちあがる。

「プロデューサーさん、追いますよ！」

「お、おい！追うって・・・お前買い物は！」

「時間があつたらあとで買います！」

「いやそうじゃなくて・・・ちよっと待てって！」

伝票はともかく荷物の一つも持たずに出て行った春香を急いで追いかける。

「・・・レジのお兄さんに気の毒そうな視線を向けられたのは気のせいだろう。」

バスに乗って十数分、そこからひたすら歩いて郊外に出る。細い道を迷うことなく進んでいく千早。

「ふう・・・はぁ・・・千早ちゃん、どこまで行くのかな・・・。プロデューサーさん、この辺りって何があるんです？」

「いや、さすがにここまでは来たことないからわからないな」

その数十メートル後ろで息を切らす春香。日高は行く先を見ながら首を傾げる。

「中心街から随分離れたけど、誰かと会う気配もない・・・」

「ずっと住宅街です・・・これじゃお買い物出来るところもないですよ」

「ほら、千早曲ったぞ、追いかけよう」

角に姿が隠れたことを確認して追いかけて、春香より先に千早を捉える。

春香は日陰を探して一休み、といったふうで、丁度目の前にあった自販機に手を伸ばす。

「こら、音ではれるだろう」

「・・・プロデューサーさん、ノリノリじゃないですか」

「・・・そう言われると否定はできない」

真剣そうな横顔に春香から思わずふと漏れたそのセリフは、少し熱の入っていた日高を正気に戻すに足るものだった。

春香の顔色はそれほど悪くはないが、汗がただらと頬を伝っている。長距離の歩行移動で少し疲れも見えた。

日高は財布の中を探って、五百円玉を一枚取り出し、

「こんなに暑いと熱中症とか脱水症状とか怖いしな。ほい、これを買ってきな」

と春香に手渡す。

「え、いいんですか？」

「アイドルの体調管理はプロデューサーの仕事だからな。ただし、おつりはちゃんと返せよ？」

「ありがとうございまーす！」

嬉々とした表情で自販機の前へと向かう春香を見送ってから、早速に視線を戻した。

幸い今のやり取りの間に見失ってしまうことはなく、千早は辺りを気にしているのか、それとも何かを探しているのか群青の髪を揺らしながら、速度を落として歩いていった。

まさかここまで来て迷った、なんてこともないだろう。次の曲がり角に差し掛かった頃、春香の声が耳元に近づく。

「戻りましたー、千早ちゃんはどうですか？」

「ん、まだそこにいるけど・・・もしかしたら気付かれたかもしれない。なんかきよろきよろしてるし」

「え、本当ですか？」

「いや、まだわからん。後ろ見ないからまだ気付かれてないんじゃないかな。何かを探してるような感じだ」

「このあたりで何かを探すって・・・あ、プロデューサーさんこれ」  
「ん？」

春香がにつこりとして手渡したのは、230円の小銭と

「コーヒー？」

「プロデューサーさんも喉乾いてるかなと思って一緒に買って来たんです。まあわたしのお金じゃないですけど・・・」

あはは、と苦笑いの春香に日高は軽く微笑み返した。

「いや、助かるよ。丁度そう思ってたところだ」

「ほんとですか？ブラックですけど、微糖のほうがよかったのかないですか？」

「微糖はすこし苦手なんだ。変に甘いよりこの方がすっきりするしな」

そう言ってプルタブを空けて一口。

「ん、でもそんな悩んだならお茶とかでよかったんじゃないのか？」

「張り込みにお茶は似合いませんよう」

「なるほど・・・」

よくわからない理屈をさらっと述べた春香といえば、すっかりスポーツドリンクなど手にしている。それも絵面としてどうか、などと突っ込みを入れようとしたが、

「あ、プロデューサーさん！千早ちゃんがいません！」

「え！？」

春香の叫びによってそれは未遂に終わった。いつの間にか千早がどこにも見当たらなくなっているのだ。急いで先程の位置まで走るが、影も形もない。

「しまったなあ・・・もつとしつかり見ていれば・・・」

「仕方ないですよ、ちよつとこのあたり探してみましよう」

春香の言葉に頷いて最寄りの角を曲ってみる。住宅街を当てもなくさまようのは危険なのだが、今回は幸い曲つて少ししたところに大きい家があり、そこから先は行き止まりになっていた。

引き返してその次の角に入っても、時間が経ちすぎたせいか千早の姿はなかった。

「あ、プロデューサーさん」

「見つけたか？」

「いえ、そうじゃなくて・・・あそこにお花屋さんがありますから、ちよつと訊いてみましょうよ。もしかしたら前を通ってるのを見たかもしれないし」

春香が指さしたのは、いかにも老舗という感じのするそれだ。佇まいも今時のものよりもずつとおとなしく、住宅街にすっきり溶け込んでいる。

「そうだな、そこで情報を得られなかったら、仕方ないから帰ろう」

「はい。あ、出て来た。プロデューサーさんはここで待って下さい。すいませーん！」

店外に出している花の手入れに来たらしい男性に春香は声をかけながら近寄った。

「いらつしやいませー」

「あ、ごめんなさい。お花を買いに来たわけじゃないんですけど・・この辺でロングヘアーの女の子、見ませんでした？」

マニュアル通り丁寧な接客に良心が痛むのか、一言謝ってから本題へ入る。

「あー、その子だったらウチで花買ってから向こう側に行っただけ・・キミ、如月さんの友達？」

「え？千早ちゃんを知ってるんですか？」

「去年も一昨年もこの日に来てたからね。そのもう少し前はお母さんと一緒に、その時話したから覚えてるんだ。そこを曲がって少ししたら広い所に出るから、そのあたりにいると思うよ」

青年はあっち、と指で指し示す。

「あの、それっていつ頃から？」

「え、つと・・・」

少し空を仰いでからまたすぐ戻り「うん」と誰に言うでもなく肯定し、告げた。

「確か、六年前ぐらいからだったかな」

「ぶ、プロデューサーさん・・・本当にこっちで合ってるんですか・・・？」

「いや、春香が訊いたんだろう・・・」  
先程までとは反対に若干涙声。

「だ、だってここ・・・お墓ですよ・・・？」

周りを見回しながら歩幅を狭め、日高の後ろに隠れるようにして進む春香に、日高はため息を漏らした。

「大丈夫だよ春香。今は昼間なんだし」

「でもやつぱり雰囲気違いますし、それにこの前見たホラー映画がまだ頭に残ってるんです」

「また見たのか・・・友達からの誘いでも怖かったらそういうのは見るなって前にも」

「いえ、誘ったのはわたしなんですけど・・・」

「・・・春香、お前やつぱり好きなんじゃないのか？」

「・・・えへへ」

だめだ。これは怖いもの見たさとかそういうのじゃない。お化け屋敷とかに進んで入って、絶叫を楽しむタイプだ。

「そのシチュエーションが丁度こんな感じだったんですよ。大学生の二人が肝試しの下見で昼間の墓場に・・・」

「いや話さなくても」

「自分だけ怖い嫌いじゃないですか。で、その二人が周囲を終わって・・・」

巻き添えか、と日高は苦笑する。映画と一緒に見に行ったという友人も、そういう理由で誘ったのだろうか・・・。

「帰ろうとしたら、誰もいなかったはずのお墓から変な歌声が聞こえ」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

空に響き渡る、透き通った高い声。春香の顔がみるみる青ざめていく。

「ぶ、ぶろ」

「そういう話は霊を呼ぶって言うよな」

「や、やめて下さいよ・・・」

「迷信だから気にしない。それより行ってみるか」

「あ、ちょっと待って下さいって！」

入口を探して入っていく日高を止めようと追いかけるも、脳裏に再生されるものの怖さからか、次第に速度が落ちていく。

「プロデューサーさん、待って下さいってば！その映画だとこの先に」

俺の予想だとこの先に……。

日高は遠くなつた春香の忠告を無視して進んでいく。先の歌声に聴き覚えがあるのだ。声がした方向に、曖昧に歩いていった。

少し歩くと、見通しのいい広場に出た。その歌声はもう聞こえない。日高は立ち止りきよきよとあたりを見回す。

「ちゃんと聞いてくださいプロデューサーさん、その先にロングヘアの……ひっ！」

「え！？どうした？」

と、遅れて追いついた春香は突然、素っ頓狂な声を上げて座りこむ。思いもよらぬ事態に慌ててフォローにかかる日高。

どうしたか、という問いに春香は一向に答えを言わず、その代わりにカタカタと震えた指先で、自分の視線が釘付けになっている方を指さした。

見ると逆光でシルエットまでしか見えないものの、『ロングヘア』の『女性らしき影』がある。

「……えっと、春香。その続き聞いてもいいか」

「ええ、な、なんですか？」

シルエットの顔と思しき部分が傾いた。こちらを見ている。

「なんでもいいから。それで、どうなるんだ？その二人は逃げたのか？」

「……その時の記憶だけなくなって、表向きは普段通りの生活に戻ります。ただし……」

「ただし……？」

シルエットが近づいてきた。夏日の強い逆光の所為でまだよく見



えてこない。

そんな状態で日高は固唾を飲んで春香の言葉を待つ。

「二人に見えてる景色は幻覚で、実は死後の世界に・・・」

「逃げられないのかよ!？」

ああ、瓢箪から駒とはこのことをいうのか。霊を呼ぶなんて俺が言わなければこんなことには・・・。

終わった・・・。

「何をしているんです」

「・・・え?」

いろいろと覚悟していた二人にかかったのは、聞き慣れた女の子の声だった。

群青のロングヘアーに、それが映える長身。どこか冷めた眼差しで二人を見下ろす彼女は、

「千早ちゃん!」

探していた当人そのものだったのだ。

「「ごめんなさい」」

「・・・」

深々と頭を下げる両者に突き刺さる視線。千早は無言のままに二人を見つめる。

（プロデューサーさん、ものすごく痛い視線を感じるんですけど）

痺れを切らしたのか、頭を下げたままの春香は隣の日高に小声で話しかける。

（まあ、それが当然の反応だろうな）

「プロデューサー、何を話してるんです?」

「いえ、なんでもございません」

「ち、千早ちゃん・・・なんか怖いよ・・・?」

墓場の真ん中で下ばかり見るのも疲れたのか、春香は少しだけ視

線を上傾ける。

「ストーリーまがいのことをされて、怖くならないわけないでしょう」

辛辣・・・いや当然の発言と相変わらずの差すような目つきに圧倒された春香は再び小さく縮こまった。

その様子を見て少しばかり溜飲が下がったのか、千早は「はぁ・・・」と小さくため息。

「・・・もういいです。それに随分前から知ってましたし」

「え、っと、いつから？」

「・・・あのね春香。同じバスに乗っててわからないわけがないでしょう。プロデューサーも、尾行するつもりならタクシーとかのほうがいいことぐらいわかるでしょう？」

「いや、金がなくてだな」

「あと、カーブミラーぐらいチェックしてください。思い切り映ってましたよ」

「・・・なるほど、映画やドラマの見よう見まねではだめ、ということか。」

さらに日高のそれに対する知識はなかなか古い。電子機器の発達した現代からしてみればもうその方式は埃を被っている上、必要最低限の注意すら払っていないのではばれて当然だ。

「・・・でもそんなに前からわかってたなら、なんで追いつき返さなかったんだ？」

「・・・そろそろ話してもいい頃だと思って。二人とも、こっちへ」

「わたしも？」

「そう、春香も。パートナーなんだから、私が歌う理由を知ってもらったほうがいいわ」

「歌う・・・理由？」

見ればわかるわ、と返して千早は先に立ち、二人をひとつの墓の前につれて来た。

『如月家ノ墓』と書かれたその墓を見て、千早は一言、

「弟です」と告げた。

「え？おとうと、って・・・千早ちゃん、一人っ子じゃ」

「七年前に、交通事故でね。それからずっとこの日にお墓参りに来ているの」

「え・・・あの・・・ごめんなさい。そんなことも知らないで勝手についてきたりして・・・」

「そのことならさっきも言ったでしょ？私が話したいから話してるのよ」

「うん・・・」

「じゃあ、千早が歌っているのは弟のためなのか」

「・・・昔よく褒めてくれたんです、私の歌を。憧れて歌い始めた舞さんの『ALIVE』を、一番よく聴いていてくれました」

戻らない時代を懐かしみながら、千早は一言一言丁寧に繋ぎ合わせていった。

「弟のため・・・になっているとは思わないですけど、両親が離婚して、母とも仲違いしている私にとって、この子との繋がりはもうこれしかないんです。この子がよく褒めてくれた、この歌しか・・・」

「・・・」

『ならいいんだけど・・・。さて、そろそろ帰らないで大丈夫？夜遅くなると危ないし、親も心配するだろ？』

『・・・いえ、もう少し練習していきます。いつも遅い時間までやっているの、母もわかっていると思いますし』

初めて会った公園での彼女の表情が鮮明に思い出される。あの時の曇ったそれは、そういうことだったのか。

「だから私は、この歌で歌手としてトップに立ちたい。そして、きつとそれが私の」

「・・・千早ちゃん？」

「・・・あ、ううん、なんでもないわ」

それが私の？

弟のため、以外にも何かあるのだろうか。なんでもないセリフに日高は疑惑を抱く。

そして予感する。千早の歌の中心はおそらく、最後に出かけた『それ』なのだろう、と。

「ですからプロデューサー、お願いです。私をトップボーカリストに導いてください。そのための努力なら、惜しむつもりはありませんから。これからもよろしくお願いします」

「・・・ああ、俺も千早の歌が本物になるように努力する。出来るだけ歌の仕事をとってくるよ。こっちこそよろしくな」

「あ、あの千早ちゃん！わたし、もっ頑張るから！一緒にトップアイドル・・・じゃなかった、トップボーカリストになるう、ね！？」

今の話聞いて涙ぐんでいる春香の微妙な嗚咽交じりの声に、千早は少し苦笑し、

「・・・ふふっ、ええ。よろしくね、春香」

やがてその表情は柔らかい笑みに変わった。

そうか、やっとわかった。千早の歌に抱く小さな違和感が。

しかし・・・これは千早自身の問題。俺ができるのは、その手助けまで。

だができることはすべてしてやりたい。それがきつと、俺と彼女らが出会った理由なんだと思う。

#### その4『緩やかな休日の、緊迫した過ごし方』（後書き）

前書きにも書きましたが、遅くなって本当に申し訳ないです……。バイトスケジュールがきつくて、全然書く暇がないorzこの連休中にできるところまで書き進めておかないとなあ……。

とここでちょっとした質問なんです（面倒な場合は答えなくて大丈夫です）、この二次小説で、原作とのキャラブレが激しい、と思うキャラいますかね？原作準拠を掲げているので、もしそういうのがありましたら、言っていただければ可能な範囲で直します。

次回はシリアス（笑）です。お楽しみに？

追記：最後直しました。完全に気の逸りです。日高がそんなこと知ってるわけねーじゃん慌てて直しましたww

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1123v/>

---

私は愛どる！春香＆千早過去編

2011年10月9日03時14分発行